ORIENTEERING JAPAN

O-JAPAN

シンキングスポーツ・オリエンテーリング

94/4

1994年［平成6年］4月10日発行
（毎月1回10日発行）
第11巻第4号通巻第129号
昭和63年6月24日第三種郵便物認可

伊勢の森

(伊勢市長　水谷光男　筆)

이세의수풀

平成5年度（第20回）全日本オリエンテーリング大会
兼　日韓親善交流大会
第10回三重県民オリエンテーリング大会

(社) 日本オリエンテーリング協会
三重県オリエンテーリング協会
平成6年3月20日（日）
三重県伊勢市
大会本部連絡先　TEL 39－1479

① H21-E			6,900			420	
▷							
1	202				1		
2	227						
3	222				3		
4	228						
5	229				1		
6	230				2		
7	215						
8	210						
9	233						
10	241						
11	278				2		
12	276	↓			2		
13	271				1.5		
14	283	←					
15	265	↘			1		
16	888						
○－－－ 200 －－－→◎							

自動車専用道路、主要道路	排水点、貯水槽、溝、細い湿地
道路	渡れない川、小川、堰、せき
道	大きなこぶ、こぶ、土手
小道	凹地、小さな凹地、穴
小径	横穴、きれつ、かれ溝
植生界（明瞭、明瞭）	水のない湿地・畑田、水のある湿地
フェンス（通行不能、可能）	立入禁止の開けた土地（耕作地）
建物、ビニールハウス、簡易	果樹園
建物密集地	立入可能な開けた土地
通行不能のがけ	民家の散地
岩がけ、土がけ	荒地、植林地
石垣、土塁	走行可能
塔、ほこら、記念碑、小塔	歩いてしか進めない
岩、採掘場跡、鉄塔、送電線	通行困難
池、小さな池	

[本誌掲載のため，約65％に縮小]

調査期間：平成3年4月～平成4年12月
調査者　市川直樹　伊藤誠厚
伊藤哲夫　稲垣　真
小坂早和　小林　茂
小八重善郎　坂本　学
田垣寛郎　田原　豊
仲　明徳　野呂和明
早川正美　宮田敏雄
宮林　稔
作図者　小八重善郎　藤　宗司
印　刷　㈱アイプレーン

第10回国民文化祭みえ94
会期・平成6年10月22日(土)～30日(日)

1994. 7. 22(金)→11. 6(日)
まつり博・三重'94

O-JAPAN

去る２月19日に開かれた，第５回全国ふるさと交流兵庫大会～ふれあい淡路オリエンテーリング大会～（＝翌20日開催）の開会式の模様。

［福田良雄氏提供］

□今月の表紙：３月２１日開催の青山高原リレーＯＬ大会。６Ｒクラス，１走トップゴールのデッドヒート。
１位・村越　真と，２位・鹿島田浩二。

［桐田幸宏氏撮影］

□今月の地図：３月２０日，三重県伊勢市で開催された第２０回全日本オリエンテーリング大会のＨ２１－Ｅのコース図。大会のリポートは２～３ページ。

［島根ＯＣ・財間定義氏提供］

□ □ □

９４／４月号・№１２９　目 次

●＝イベント・リポート＝ ……4-5
「第２０回全日本オリエンテーリング大会」
文・写真／桐田　幸宏

●＝インカレ特集＝ ……6-17
「インカレ９３」　取材・編集／桐田　幸宏・岩出　雅人
＝日本の入江（東北大３年）学生界を制す！
＝金並由香（早稲田大４年）貫禄の金メダル！
＝東北大・東大決戦！　勝利の微笑みは東北へ
＝覇者早稲田、女子の王座へ！
［優勝者のプロフィール］
＝完璧な準備→大差の勝利　入江　崇
＝悔いのないレース　金並　由香
＝最後のインカレ、３人で勝った！　金並　由香
＝インカレ史上最速（？）のウィニングラン
東北大学代表選手一同

●＝オリエンティアのための Medical Advice ＝……18-19
「読者の質問に対する回答①：牛乳について」愛場　庸雅

●＝オリエンティアのための本棚＝ ……20
第９回：文藝春秋編「チーズ図鑑」　文藝春秋
文：村越　真／カット：早川喜代美

●＝ＳＱＵＡＤ　ＲＥＰＯＲＴ＝ ……21-23
「９３年度エリートポイント最終結果」
SQUAD 広報担当　桐田　幸宏

●＝お知らせのページ＝ ……24
「訃報＝太田勝美氏逝去さる」
「長野県オリエンテーリング協会より」
「編集部より」

□ □ □

ＳＴＲＥＡＭＥＲ

首相の交代劇のあおりで，特に現野党の自民党から分かれていくつかの政党や会派ができつつある。 オリエンテーリングの世界でも，かねてからの私の持論であるクラブの細分化が行なわれたり，それぞれに特色を持った新しいクラブが続々と誕生してこないものか。「フツーのクラブ」でも「キラリと光る小さなクラブ」でも何でもよい，多数のクラブが都道府県の協会の構成員となり，均衡のとれた VOTING RIGHT を持てば，末端の（という言葉使いはしたくないが）数多くの意見が反映されるし，それが中央（ＪＯＡ）の政策やプラン策定にまで盛り込まれるであろう。ＪＯＡにおいて，そのような民主的な人事や会議や運営がなされていることが条件ではあるが…。例えば「専門委員会」などはＪＯＡ発足当初から存在していてよかった筈であるが，ひとりの人の強硬な考え方が働いて，前専門委員会が解散（されたのかどうかも分らないうちに），さりとて新しい専門委員会ができたのは２年も後であった。ここで１年もかけて制定された「競技規則」が施行されるのが来年の４月１日である。専門委員長がいろいろな（？）人たちの意見を聞かれる努力をされたことは評価しご苦労様といいたいが，遅い。本誌を利用して一辺にいろいろな人たちに問いかけ集約すれば２～３か月で済むこと。専門委員会といえば，今度「普及教育」関係のものができるらしいが，スキーＯ，トリム，企画・調整，広報，地図，ランキング，国際関係の各専門委員会はどうなるのか。この世界だけは，一部の人間の強権政治にならないよう願いたい。

流人

第２０回全日本オリエンテーリング大会

H21E　村越真１５連覇・大偉業なおも更新
鹿島田浩二・今年も２位

いったい、いつまで勝つのか。誰が村越を破るのか。
今年も村越は連勝記録を更新した。２回目となった村越vs鹿島田対決も結果のとおり。
２位・鹿島田、３位・小長井は昨年度（92年度）インカレ個人戦の１位、２位である。年間を通してレース数の少ない小長井だが、潜在的な実力が示された形。４位の元木も健闘が光った。
村越真の１５連覇については、来月号で特集する。

→ H21E表彰式。左から、小長井信宏・村越真・鹿島田浩二。

H19-20E　吉村年史初優勝
学生champ・入江崇、よもやの４位

H19-20E表彰式。左から吉村年史・岡安隆史。吉村は昨年は１０位だった。

『まあ、こういうヤブは慣れてますからね。入江がこけただけでしょう。（吉村）』あっさり語っていた。
２位の岡安は来年への抱負を語る。『自分でもかなりツボってて、勝てるレースではなかった。２位になってびっくりした。来年はインカレの個人戦優勝をマジに考えている。甘く見てて、トレーニングをこれまではしないたちだった。今年はトレーニングしようかな。（岡安）』
学生champで、今や日本のトップレベルにもいる入江崇は、２連覇がならなかった。『今日は速く走りすぎちゃったのかもしれない。21Eで村越さんと、鹿島田さんが競ってるじゃないですか。やっぱりそれより速いタイム出したいと思って欲を出して、その結果、そのスピードに対する技術ないということがわかってしまいました。（入江）』来年は、鹿島田とともに対村越の好レースを期待したい。インカレも、あと１年残している彼は、今回成績の良かった選手たちへの期待も語る。『来年は今の４年生抜けて学生のレベルも落ちるっていわれそうですけど、３年生も吉村とか哲とか、いっぱいいるんで来年のインカレではいい勝負をしましょう。（入江）』

H21E成績　6900m　↑420m

1.村越　真	32	（静岡ＯＬＣ）	1：08：51
2.鹿島田浩二	22	（東大ＯＬＫ）	1：12：15
3.小長井信宏	22	（京都ＯＬＣ）	1：14：47
4.元木　悟	25	（長野県ＯＬ協会）	1：17：34
5.広江　淳良	29	（京葉ＯＬＣ）	1：19：48
6.澤田　晴雄	28	（神奈川県横浜市）	1：20：50

H19-20E成績　6500m　↑380m

1.吉村年史	20	（広島大ＯＬＣ）	1：14：42
2.岡安隆史	20	（千葉大ＯＬＣ）	1：20：53
3.小林　哲	20	（静岡大ＯＬＣ）	1：22：49
4.入江　崇	20	（東北大ＯＬＣ）	1：25：32
5.大前匡彦	20	（京大ＯＬＣ）	1：25：50
6.矢萩　靖	20	（慶応義塾大ＯＬＣ）	1：26：33

D21E　木植早生２連覇
往年のベテラン勢メダルを独占

『２番で、「しまったあ、こんなにやっちゃった。」（木植）』相当なつぼりあいだった様だが、特に２番でつぼったランナーは多かったようだ。優勝した木植も、ちょっと地図上では表現しきれないほどウロウロしている。しかしタイムは圧勝だった。終わってみると、上位の三つを占めたのは、過去の全日本選手権者経験者ばかりである。
２位の高野は、旧姓・長田由紀時代に第５回・６回、そして第８回～１３回に６連覇で優勝を飾っている。さらに第１６回でも、名前が変わってからの返り咲きをはたしている偉大な選手である。３位・出田は、やはり旧姓・井手裕子時代に、第４回と７回を制した選手。最近でも第１７回の３位を含め、ここ６年連続の６位以内を果たしてきた。４位の宮本は昨年度２位。このあたりまでベテラン勢が見事に並んでいる。
５位には１週間前のインカレを制した学生champの金並が入っているが、決していいレースではなかったようだ。

さて、2位の高野だが、久々に優勝を狙った。みんなはつぼって自分だけはつぼらないはずだったのが、2番と11番で致命的にやったという。

『やっぱさ、子供生んでから5年だけど、その間優勝したこともあったんだけど、自分が勝てるとか思って走ったことなかったんだよね。今年は急に勝てるんじゃないかと思って。勝とうと思った。多少気が楽になったこともあるんだろうけど、はっきりした理由ってないんじゃない。自然のなりゆきっていうか。最近オリエンテーリングするのがすごい楽しいっていうのも出てきたし。苦しかったんだよね。仕事やって、家事やって・・・。レースが苦しくってさ・・・。秋は公認1つもでなかったの。そういう時期あると出たくなるよね。全日本前にすごくうれしくってね。普段考えると、勝てる訳ないんだけど、勝てるんじゃないかと思いはじめてね・・。これまで守りだったじゃない。夢みたいに、勝つんだ・勝つんだというのは生まれて初めてだったかもしれない。（高野）』

木植の優勝に対しては、むしろ若い選手へのもどかしさもあるようだ。『思ったの。みんな「早生さんにはかなわないけど・・・・」って感じで。あれじゃだめですね。早生ちゃんプレッシャーかからないと。このままじゃ天下が続くね。（高野）』

木植さんは写真をとるのが趣味である。当日自分のレース前に、スタート地点まで写真をとりに来ていた。その余裕ぶりには、むしろ周りが驚かされている。

D21E表彰式。左から出田裕子・木植早生・高野由紀。

D21E成績	6400m ↑340m	
1.木植　早生	32（茨城小中教員C）	1：09：41
2.高野　由紀	33（東京OLC）	1：19：29
3.出田　裕子	35（OLP兵庫）	1：20：38
4.宮本知江子	29（京葉OLC）	1：20：47
5.金並　由香	21（早大OC）	1：22：58
6.加納　尚子	23（TeamZebra）	1：23：48

千葉あかね、D19-20E史上・初の2連覇
インカレchampを抑えDE総合で学生トップに

D19-20E表彰式。左から稲村仁美・千葉あかね・志村聡子。

『2番で終わったと思った。（千葉）』そうだ。D19-20EはD21Eと同じコース。話を聞くと、D21E優勝の木植さんとほとんど同じようにミスしている。『1→2は、沢を降りて、あんぶに行くというのが経験なくて、イメージできなかった。16分だか18分だかかかってたんですよ。それで終わったかと思っていたから、結果は意外だった。（千葉）』

それ以上にほかのランナーがつぼっていたようだ。千葉あかねは二連覇。D21Eとの総合で見ても5位。学生champの金並をわずかに抑えて、学生としての最高位につけた。インカレでメダルをとれなかっただけに、レースへの集中は他の選手に勝っていたのかもしれない。高野由紀はいう。『いいタイムだと思うよ。あかねちゃんはもう、ここら辺に入ってもいいレベルだからね。』彼女には、今後のD21Eでの活躍にも大いに期待したいところだ。

2位は、インカレ4位の志村。3位にインカレ5位の稲村が入った。志村はインカレ後体調を崩してのレースとなったようだ。

インカレ3位だった金田収子は、どこかへ飛んでいった。

4位山口は、第1回ショートインカレのchamp。インカレは不調に終わったが、今回はまとめてきた。このあたりまでが、21Eでいうと12位・金子しのぶ、13位・福士淑子と同じ位のタイム。両者の不調さを差し引いても、まずまずの健闘だったといえる。

D21E・D19-20Eの1→2。木植は手前のピークから南の尾根にいき、戻って今度は東の尾根をたどり、再び西へピークの手前まで戻り、ピークを巻いてようやく沢に落ちている。

D19-20E成績	（D21Eと同一コース）	
1.千葉あかね	20（東大OLK）	1：22：32
2.志村　聡子	20（早大OC）	1：26：06
3.稲村　仁美	20（広島大OLC）	1：27：37
4.山口　純子	19（名古屋大OLC）	1：27：47
5.山本　康世	20（東大OLK）	1：34：15
6.中野　宏美	20（静岡大OLC）	1：34：38

リポート　桐田幸宏

インカレ93

取材・編集　桐田　幸宏・岩出　雅人

平成6年3月11日～13日、第16回日本学生オリエンテーリング選手権大会が群馬県渋川市吾妻郡東村において開催された。

個人戦は、一般クラスの大半のゴールを選手権クラスのトップゴール前におく演出効果も設定される中、男子入江崇（東北大3年）、女子金並由香（早稲田大4年）が、2位以下に大差をつけて圧勝した。翌、団体戦は、両Champ率いる東北大と早稲田大が、それぞれ強豪東大と静岡大に競い勝ち、その手に優勝旗をおさめた。

日本の入江（東北大3年）、学生界を制す！

個人戦のプランナーである松葉敏則氏（早大OB）は、そのコースについて、「基本は基本通り。走力、技術を試す。ルートのバリエーションをなるべく多くする。走力も技術力も充分備えた人が勝てる。これは男女共通。」と、語っている。結果を見ると、男子も女子も確かに実力者が顔をそろえた。特に女子において、シード選手の大半が入賞を果たしたことは、特筆すべきことである。

また、優勝した男子・入江崇、女子・金並由香は、共に2位以下を大きく引き離しており絶対的な力を見せつけた。「男子に関しては、抜け出た入江がいた訳だし、差がついたのは予想通り。思ったより男子も女子もつぼりあいになった。大きなミスをした人が多かった。男子に関しては、走力のある人が上にきたのかなという印象もある。（松葉氏）」

男子優勝の入江崇（東北大3年）は、既に1年生の時から頭角をあらわし、個人・団体ともエリートを走っている。2年生の昨年は、個人戦3位。団体戦もすばらしいタイムをマークし、鹿島田浩二をして「末恐ろしいやつ」と言わしめた。本年度（93年度）は、WMのセレクション第2戦でトップとなり、日本代表に。この10月、アメリカへ渡った。翌週の第1回ショートインカレも制している。次回のWMでは、村越・鹿島田に次ぐNo.3の呼び声も高く、本格的な実力者であると言える。

「入江のタイムは、でないことはないと思ったが、実際はそんないいレースできるとも思わなかったので、結果は予想よりはいいタイムがでたと思います。入江は思ったより、かなり強くなってますね。シーズン中とは結構違ったテラインなのに速かったのはすごいと思いました。（松葉氏）」

入江本人はこう語る。「ゆっくりやったんですよ。作戦としては、ちゃんと走れば2～3分は貯金ができるハズなんで、それをゴールまでに使い果たしてもいいから、つぼらないように。あんな大差がついているとは思わなくて、レース中2分くらいのミスしたんで、それで貯金は使い果たしたかなと…。」

男子については、④→⑤がカギとなったようである。

3位の安斎秀樹（東北大4年）は、④までは入江と1分少々しか差がなかった。⑤で一気に離された形となる。5位のシード選手・鈴木卓弥（東大4年）も⑤で完全に脱落。④→⑤で鈴木は、2分後スタートの安斎に会ってしまう。お互い動揺があったようだ。安斎から提出されたルート図にコメントがある。「卓弥が見え、お互い確認した。ツボってちょっと落胆していたが、⑤のパンチで再び卓弥と出会い、お互い「あきらめるな」と声をかけあう。何度も振り切ろうとしたがダメ。卓弥と抜きつ抜かれつのデッドヒートになる」鈴木のコメントは、「④→⑤で泣きそうになった」

2位のシード選手・桜井太郎（東大4年）は、ロングレッグの⑦→⑧のラップが2位。ここで5位から2位に上がっている。あとは平均的なタイムをつないでおり、安定した走りで2位にすべりこんだと言えるだろう。

4位の松澤俊行（東北大3年）は、前半がすごく遅く、⑤の時点でまだ19位である。そこから追いあげた形。⑩と⑪では1位のラップを続けている。

6位の白神謙吾（京大4年）は桜井と同様、安定性があった。

入賞を逃した選手としては、7位の野田健史（東北大2年）、8位のシード選手・山本英勝（東大4年）も、充分入賞にはからめる位置にいた。野田は⑪時点で、1位のラップをとっていることを考えれば、逆転は充分可能だった。誰もつぼらない⑪→⑫のレッグで、1分前後のロスをしたのが致命傷。もし彼が白神をかわしていれば、入賞は東北大と東大に独占される結果となっていた。山本は⑦まで4位、⑨まで5位である。⑩で入賞圏外に落ち、⑪で決定的に脱落した。ミスの度合いが勝敗を決したようだ。

「大きなミスをしなかったのは、入江・桜井・白神ぐらいで、あとは大きなミスをしたレッグのある人が多い。だからもうちょっとまとまったレースをすれば、安斎や卓弥は入江にもっとせまれるタイムが出たんじゃないか。」と、プランナーの松葉氏は締め括った。

なお、表に示したラップタイムは、松葉氏の個人集計によるもの。成績表に掲載される正式なものではないので、参考ということで御了承を願う。

	S→①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	G
1．入江　崇 (1°19′40″)	9′40″	5′45″	5′50″	6′16″	8′02″	4′48″	4′31″	15′38″	2′52″	3′16″	9′15″	1′14″	2′33″
2．桜井太郎 (1°29′14″)	11′10″	6′37″	6′59″	6′45″	9′58″	5′36″	4′49″	16′35″	3′54″	3′29″	9′11″	1′24″	2′47″
3．安斎秀樹 (1°29′19″)	9′58″	5′47″	6′30″	6′41″	12′16″	4′26″	4′22″	20′10″	2′58″	2′54″	9′21″	1′27″	2′29″
4．松澤俊行 (1°30′14″)	12′07″	7′04″	9′19″	5′40″	10′26″	4′41″	4′33″	17′10″	3′53″	2′54″	8′41″	1′21″	2′25″
5．鈴木卓弥 (1°31′34″)	10′06″	6′39″	6′28″	6′52″	13′10″	4′35″	4′22″	19′54″	2′56″	3′10″	9′22″	1′21″	2′39″
6．白神謙吾 (1°32′27″)	10′52″	6′34″	6′41″	7′08″	8′13″	5′50″	5′25″	18′54″	3′49″	3′57″	10′51″	1′12″	3′01″

個人戦男子入賞者の各レッグ区間タイム

金並由香（早稲田大４年）、 貫禄の金メダル！

女子個人戦は、早稲田大４年・金並由香の圧勝に終わった。金並は、男子・入江と共に２つの金メダルを獲得。個人戦・団体戦の両日にわたって、大活躍を演じた。

金並が優勝を決定的にしたのは、④→⑤のレッグ。このレッグのラップが光っている。

２位から６位の入賞争いは混戦だった模様。あまり、目立ってどこのレッグがどうというのはなく、７位の山下和子、８位の千葉あかねまで含めて、２位も狙える圏内にいた。「トップのタイムはかなり速いと思う。予想よりも意外とショーレッグで１分とか差がついてるところが多くて、その辺が男子と異なる。」とプランナーの松葉氏は語る。

ラップタイムについては、優勝した金並がS→①、④→⑤、⑤→⑥、⑨→⑩の４つのレッグでトップをとっており、２位・酒井佳子（北海道大４年）が、③→④、⑦→⑧、⑩→Gの３つ。この辺の結果が順位に反映された形だが、おもしろいところでは昨年度６位の中野宏美（静岡大３年）が、②→③、⑥→⑦の２つで１位のラップをとっていながら最終27位に終わっている。他のレッグはすべて30位前後だった模様。②→③、⑥→⑦は共にショートレッグである。ショートレッグの得手・不得手が表現されたということか。興味深い結果である。

３位の金田収子（静岡大３年）は、④→⑤のレッグで入賞者では唯一人、異例のルートをとっている（地図参照）。④でルートに迷って、ずいぶん立ち止まっていたそうだが、それでも他の選手がとった尾根回りのルートは見えなかったようで、植生界ぞいにたどろうとしてそのルートたどりにも失敗したようだ。「ハズした、ハズした」と思いながら、のろのろしたレースだったと述懐している。そのわりには、金並以外の選手に対し、ルートから思える程のロスタイムを出していないのがおもしろいところである。尾根をたどった選手も金並選手以外は全員、手前の尾根でパラレルエラーを演じている。

４位の志村聡子（早稲田大３年）は、⑨でミスがあり、このレッグで順位を３位から５位に落とす。ここで一旦、最終５位の稲村仁美（広島大３年）に逆転されている。５位の稲村、６位の植田佳子（広島大３年）には、特に目立ったラップはない。大きなミスのなかったことが入賞につながった。植田は、唯一ノーシードでの入賞入りを果たしている。

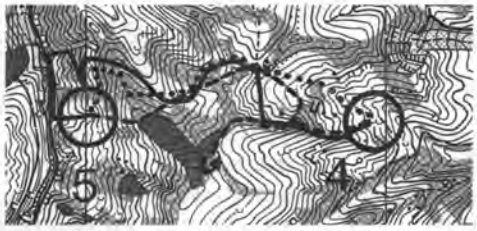
７位だった山本和子（筑波大３年）は、酒井の２分前スタート。前半で早々に抜かれるが、問題の④→⑤のレッグで金並に次ぐ２位のラップをとり（14′ 50″ ）、再び酒井を逆転。⑦で後ろからきた酒井につられて、一緒につぼってしまったようだ。ここで酒井と明暗を分け山下は脱落。次のレッグで１位のラップをとった酒井が２位にまで上がるのである。

⑨をチェックする金田選手

８位に終わったシード選手の千葉あかね（津田塾大３年）は、⑦までは３位、⑧でも６位であるが、ラス前の⑧→⑨に９′ 40″ かかり、５分程度のロスをする。入賞を逃したという意味では、ここが致命的だった。

他、前半だけを見ると京都大学４年の吉川素子が④までは３位、問題の④→⑤で９位に落ち、⑥で更に脱落していった。

３位から８位を独占した３年生陣は、来年度の激しい優勝争いを演じることになるだろう。２年生の原志保子（静岡大・個人10位）、山口純子（名古屋大・第１回ショートインカレChamp ）などがどうくいこんでくるかも見もの。楽しみな１年になりそうである。



（左上）個人戦女子④→⑤

…… 金並　　—·—· 酒井
------ 金田　　—— 志村・稲村・植田

	S→①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	G
1．金並由香 (1′03′41′)	3′19″	9′57″	4′31″	5′53″	14′04″	5′10″	4′48″	7′23″	4′01″	1′19″	3′16″
2．酒井佳子 (1′10′30′)	4′01″	11′13″	4′45″	5′50″	16′17″	6′58″	5′48″	6′52″	4′02″	1′56″	2′48″
3．金田収子 (1′11′13′)	3′48″	9′58″	5′03″	6′14″	17′31″	6′44″	5′50″	7′17″	4′16″	1′28″	3′04″
4．志村聡子 (1′12′47′)	4′19″	10′17″	4′36″	6′33″	17′47″	5′51″	4′09″	8′22″	5′53″	1′26″	3′34″
5．稲村仁美 (1′12′48′)	4′21″	9′44″	6′04″	7′12″	16′23″	7′10″	4′18″	7′52″	4′24″	1′59″	3′21″
6．植田佳子 (1′13′11′)	3′47″	9′47″	5′03″	7′57″	17′06″	6′11″	5′25″	7′09″	4′40″	1′52″	3′14″

個人戦女子入賞者の各レッグ区間タイム

（左下）個人戦男子④→⑤

安斎は「現在地ロスト。ピークの数を数え間違えどの尾根にいるのか分からなくなった。分かるところまで戻ろうとするが、④上方の沢底が見える辺りでようやくリロケート」

…… 入江・桜井　　------ 安斎　　—— 鈴木

東北大・東大決戦！
勝利の微笑みは東北へ

でたっ！必勝バックハンドタッチ？
東北大、３走安斎からアンカー入江へ

男子団体戦は、東大と東北大の一騎打ちとなった。東大は、この２年間で二連覇を果たしており、対する東北大は、２年連続２位である。一昨年の日光インカレでは、東北大アンカーの菊池正昭（本年度オフィシャル）が、東大をわずか28秒差にまで追い詰めたが、逆転優勝はならなかった。昨年の滋賀インカレでは、トップで出た東北大アンカー安斎秀樹を東大のアンカー鹿島田浩二が見事逆転しての優勝。東北大は、わずか52秒の差をもって、またしても準優勝に甘んじることとなったのである。果たして、その雪辱なるか。

提出されたオーダーは、東大が、野中俊樹－山本英勝－桜井太郎－鈴木卓弥、東北大が、高島和宏－土井聡－安斎秀樹－入江崇。東大はシード３人、個人戦入賞者２人をそろえ、東北大もシード２人、個人戦入賞者２人をそろえた。両校のオーダーにはどんな作戦があったのか。

「自分達のチームに自信持ってたから、最後任せられるのは一歩先に出る可能性のあるやつで卓弥。１走は重視している。桜井（昨年の１走）を使わなくていいくらい野中が成長してくれたのがうれしい。去年は壁があったのを、乗り越えてきてくれて信頼があった。２走は、最近キーになってきている。出てくる可能性があるとすれば、ヒディー（山本）に、いいとこ食わせてやろうかなと思った。ヒディーは東北大と一緒に帰ってきてもいいと思った。で、今年は３走勝負だと思っていた。入江は、６：４の確率で４走：３走だと思った。入江と同じじゃ勝てない。お膳立てをする為の人間を３走にする為に桜井。お膳立てさえできれば、勝てると思った。４走で勝負できる展開がつくれるかどうかが勝負だと思った。（東大チームオフィシャル・広江淳良氏）」

「作戦としては、僕（入江）がアンカーにくるのは最初に決まった。そうすると前の３人は安心して走れると。まあ、安斎さんと高島さんが次にメンバーの候補にきますよね。安定感のある高島さんを１走にして、トップからそれ程遅れないで帰ってきてもらって、安斎さんは３走にして、後半にも強い人を残しておくことで東大とも勝負ができるように。で、もう１人が、すごい。オフィシャルの人も迷ったと思うんですけど。松澤と土井、どっちにするかということで。早稲田までの結果では土井の方が松澤に勝ってるんで、はずす理由がないんじゃないか。あと土井は、全然緊張しないんで、土井でもいけるだろうということでした。（東北大４走・入江崇）」

実際のレース展開は、まず１走で東大１走の野中がトップで帰ってくる。チームの信頼に見事に応えた形。42秒遅れて、２位で東北大・高島。高島は、前日の個人戦での激しい崩れを吹き飛ばすかのような快走。その役割を果たす。東大は山本、東北大は２年生の土井が出る。３位以降には、京都・千葉・北海道と続き、そのあと少し時間があいた。４位で出た千葉大学２走の岡安隆史（３年）が、こんな回想をする。

「東北大は２分ぐらい前だったが、①番とったあと東北大と一緒になって「あれ、なんでこんなところにいるのかな」と思いながら、しばらく京都・東北と自分の３人でいて、③までは一緒だった。そのあとは、⑤か⑥まで東北と一緒で、東大のヒディーさん（山本）に追いついて、中間は一緒にパックだったと思う。そのあと別れるところで俺だけ違うポストだったんですよ。俺がそのあとミスって脱落しちゃった。」

東北大の土井には、岡安とパックになれたのがラッキーな面もあったかもしれない。今回の団体戦が、東北大と東大の完全な一騎打ちで、他の大学は全くその蚊帳の外にいたかのように言われることには納得がいかない。千葉大の岡安選手はそんな不満を投げかけている。

東大の山本は、そのあと東北大・土井を再び引き離したようだ。２走は山本がトップでゴールし、土井が２分34秒遅れて、後に続いた。千葉大・岡安は、土井に遅れること１分49秒で３位のゴールを果たしている。東大・山本には悔いが残るようだ。

「走ってる時に、桜井・卓弥に任しちゃえみたいなところがあった。今から考えれば俺と野中でもっと稼いどかなきゃいけなかった。」

さて、３走は東大・桜井、東北大・安斎がスタートしている。

「タッチを受けたのが２分40秒差（正確には34秒）。僕達の作戦では、４走タッチ時点で３分以内だったら余裕で勝てる。３走で桜井と僕だけど、実力はあまり変わらないけど、リレーコースだったらある程度つめられる。だから、僕が受けた時点でかなり余裕だった。実は、①でつぼってロスしたんですけど、後ろが入江だったんで気持ちをすぐ入れ替えることができました。⑦の中間過ぎたあとで、桜井太郎がつぼったらしくて⑧→⑨の道走りで後ろ姿が見えた。あとはコースが違ってたんで、あまりわからなかったんですけど、最終ラジコンのロングレッグの沢を切る斜面で後ろを見たら、後ろに桜井太郎がいて。勝ったなと。（東北大３走・安斎秀樹）」

「⑨→⑩の途中、後ろに安斎が見えた。⑩からの脱出したところでもまだ後ろに。僕は地図にない立入禁止ではまってる間に抜かれたらしい。あとはゴールまで、ちょっと前に姿を見ながら…。（東大３走・桜井太郎）」

３走ゴールは、トップ東北大・安斎に遅れて36秒差で桜井が帰ってくる。東北大はラジコン通過の放送が聞こえてなかったらしく、安斎の姿が見えるまで、トップで入ってくることを東北大のアンカー入江は知らなかったようだ。

東大、3走桜井からアンカー鈴木へ

	1　走	2　走	3　走	4　走
1．東北大学	高島　和宏 ② 1°04′14″ (BY)	土井　聡 ② 2°10′09″ (AY)1°05′55″	安斎　秀樹 ① 3°15′19″ (CX)1°05′10″	入江　崇 ① 4°13′55″ (DX)　58′36″
2．東京大学	野中　俊樹 ① 1°03′32″ (CX)	山本　英勝 ① 2°07′25″ (AX)1°03′53″	桜井　太郎 ② 3°15′55″ (DY)1°08′30″	鈴木　卓弥 ② 4°18′31″ (BY)1°02′36″
3．京都大学	一瀬　建日 ③ 1°05′19″ (BY)	白神　謙吾 ④ 2°12′30″ (DY)1°07′11″	滝澤　元和 ③ 3°25′10″ (AX)1°12′40″	小林　圭 ③ 4°32′50″ (CX)1°07′40″
4．北海道大学	大澤　元成 ⑤ 1°06′28″ (BY)	大川　雄介 ⑥ 2°18′15″ (DY)1°11′47″	川井　仁 ⑤ 3°27′02″ (CX)1°08′47″	野田　昇作 ④ 4°35′03″ (AX)1°08′01″
5．千葉大学	吉村　雅仁 ④ 1°06′28″ (BY)	岡安　隆史 ③ 2°11′58″ (CY)1°05′30″	佐々木良紀 ④ 3°26′30″ (AX)1°14′32″	毛利　蔵人 ⑤ 4°40′11″ (DX)1°13′41″
6．広島大学	山根　卓二 ⑨ 1°12′22″ (AX)	吉村　年史 ⑤ 2°17′34″ (BX)1°05′12″	内海はやと ⑥ 3°28′10″ (DY)1°10′36″	尾川　正洋 ⑥ 4°40′30″ (CY)1°12′20″

団体戦男子入賞校の各走者タイム

「作戦としては、僕がもろに1位でもらったら勝ちだから、必ずしもそうである必要はなくて、東大に追いつける可能性があったら作戦通りという感じで。実際のレースも作戦通りかそれ以上に高島さんと土井で東大のすぐ後ろにつけてくれて、安斎さんで逆転してくれれば一番うれしかったんですけど、そうである必要はないとも思ってたんですけど、安斎さんがトップで帰ってきましたよね。それでもう“ヤッター”という感じで。僕はもう、回ってくるだけかなと。安斎さんがずっと東大の後ろにくると思ってたんですよ。ラジコンも聞きのがしていて、待ってる時は、安斎さんができるだけ東大と離れないように帰ってきてくれと思ってて。それでいきなり安斎さんがトップに見えちゃったから、それで今までの緊張からも解放された感じで…。（東北大アンカー・入江崇）」

アンカーの入江は、最終的に東大を4分36秒引き離す快走。絵にかいたような展開で見事に優勝を飾った。2位、東京大学。

「土井、安斎を侮り過ぎたのがオフィシャルとしては失敗。ヒディー（山本）が完全なレースをしたにもかかわらず、土井がいいレースをした。安斎も後半あんなに追い上げられるランナーと思わなかった。4人ともいいレースをしたんだし、それで負けたんだから、向こうが本当に強かったということかな。（東大オフィシャル・広江淳良）」

東北大学の優勝は、4年ぶり3度目。東大とは実に3年連続、激しい優勝争いを演じた。学生界のエースとして、鹿島田浩二から入江崇へ。優勝旗のバトンタッチであったのかも知れない。昨年のインカレが終わった時、鹿島田は会報に語っている。「東北大のような大学が成功する事は、OL界のレベルアップに絶対つながるのだ。東北大を『足だけ』とあなどる輩はオリエンティアではなく、只の地図マニアだ。何故、東北大が速いのか？真剣に彼らから学ぶべきことは多い。」しかし今や、誰が東北大を侮れようか。東北大学は、押しも押されぬ学生OL界の雄となった。

「このままいけば、他の大学から見てもウチが結構有力かなと思われてると思うし、ウチも勝つつもりでいるんで、まあ今年優勝したからと言って、ここで気を抜かないようにして来年も勝ちたいですね。（東北大・入江崇）」

「優勝がかなり狙えるということを、みんな感じてて、入江以外はメンバーが誰になるかわからなかったんで、競争も激しかった。東大に勝ったのは6人目、7人目の力だと思ってます。部員は73人。1年生もコンスタントに入ってきて、伝統的にもよく育ちます。是非、他の大学にもがんばってもらいたいと思います。（東北大・安斎秀樹）」

東北大への挑戦。全国各大学の課題は明白だ。

東大に遅れること実に13分44秒。3番目のゴールを果たしたのは、早稲田大学であったが、後に1走のペナがアナウンスされて失格。昨年の、4走地図の取り間違いに続く2年連続の失格である。早稲田に遅れること35秒でゴールした京都大学が3位に入った。京都大は、4年前の岐阜インカレで初優勝を遂げて以降、3年連続の3位となった。

4位は北海道大学。北海道大は、1走5位の後、2走6位、3走5位と入賞圏内にふんばり、最後アンカーの野田昇作が千葉大を抜いて4位でゴールした。5位・千葉大学は、昨年より1つ順位を落とした。6位・広島大学は昨年に続き2年連続の6位。入賞争いから一歩おかれた筑波大学は89埼玉インカレ以来の入賞圏外で7位。少し間をおいて、一橋大・東工大・静岡大・新潟大と続いた。一ケタ順位を争ったこれらの大学は、近年力をつけてきた新興勢力が多い。来年以降が楽しみである。

躍進の著しかった北海道大を含め、東北大、広島大といった地方国立大学の活躍は今年も大いに目立った。「地方国立大学の時代」という言葉は言われて久しいが、いよいよ現実味を濃くしている感がある。このテーマについては、来月号で特集したい。

大躍進！北海道大、第二の東北大か？

覇者早稲田、女子の王座へ！

早稲田、涙のウイニングラン

インカレ直前に個人戦シード選手を取材した。女子団体戦の優勝予想も聞いてみた。

「広島か静大か。どっちを上にすればいいか？広島にしときます。勢いに乗ると強そうだし。（東北・入江崇）」「静岡・早稲田・広島。優勝だったらその辺。やっぱり今言った順かな。（東大・鈴木卓弥）」「順当にいけば静大。だけど早稲田も結構強い。広大は去年ができ過ぎでしょう。（東大・山本英勝）」

「ちょっとわかんないですね。静大とか津田塾とか。もしか、うち？（早稲田・武田光）」

「固めで静大。それか、まとめた早稲田かな。（津田塾・千葉あかね）」他、小林哲（静岡大）、吉村年史（広島大）、稲村仁美（広島大）が「静岡」を、高島和宏（東北）が「広島」をあげていた。東北地方では、同じ地方のよしみか広島大の評価が高く、あとは概ね静岡大。早稲田と比較的親交の深い東大ＯＬＫで、早稲田の評価が高いのは印象的である。

結局は、早稲田と静岡の間で争われることとなるのだが、当の本人達の事前のコメントは。

「静大。優勝しようって決めたから。広大もくるでしょうね。とにかく３人が３人でちゃんと走れれば勝てるでしょう。（静岡大・金田収子）」

「それは答えたくないですよ。本音は、早稲田が勝ちたいですね是非とも。でも広大、静岡、津田。一番強いのは、やっぱ静岡ですか？３人ともよく名前が知れているから。やっぱり、はずさないんじゃないか。広大とかだと２人は名前が知れてるけど、あと１人わかんないんで。津田も静岡程は名前が売れてない。（早稲田大・志村聡子）」

「静岡。３人そろってるかなって気がするけどね。うちは弱いですよ。１人でもハズしたら入賞あぶないかな。まあパクチでしょ、今年も。他にあげるとしたら広大、筑波。筑波は、ぱっとしないけど、まとめて帰ってきそうだから。あと津田とかも。まあ、断突で静岡じゃないですか。広島は去年より精神的にきついと思うけど…（早稲田大・金並由香）」ということであった。

レースは、早大・静岡大の間で優勝が争われ、そこに広島大が追い上げるという形になった。１走は北海道大の酒井に続き、早大・金並、静岡大・中野がゴール。２走で両校は北海道大をかわして、１位早大・志村。２位静岡大・原でゴールする。広島大は１走・三明が10位と出遅れたのを２走稲村で７位まで挽回。トップとのタイム差は、11分13秒。アンカーは早大・馬場を１分47秒追って静岡大・金田が出ている。金田は①番で早々に馬場に追いつくが、途中何度かもたつき、馬場に逆転される。早稲田大学の初優勝となった。金並・馬場は４年生。現在残る部員は３年生の志村唯一人で、志村にとっても最後の団体戦になるかもしれない。夢のような気分でウイニングランを走ったことだろう。それが見える位置で、28秒後に２位・静岡大がゴールした。その50秒後に広島大・植田がゴール。早稲田からも、わずか１分18秒差。10分近くをつめたことになり、優勝にあと一歩までせまる激しい追い上げだった。

展開を選手たちのコメントで追ってみよう。

２走。北海道大に続き２位でタッチを受けた早大・志村選手。

「予想通りの展開だったので、私は私の役目を果たそうという感じで。前にとりあえず人がいたんで追われているという感じはなかった。前は絶対抜けるという確信あったんで、ゆっくり地図読んでとにかく絶対ミスらないレースをすることに専念しました。ポストでは10秒以上止まって手続きをしっかりしました。個人戦の10倍ぐらい緊張したんですよ。結局、なんか団体戦のことばっか考えてて、個人戦はミスしてしまった。団体戦はものすごく集中してて、秒単位のミスしかしてなかった。ヤブにはまったりはして、原志保子（静大）には追いつかれました。ミスってないのに、なんで追いつかれたんだろうと不思議に思った。後半が、原志保子の方がはまり（のコース）だろうと思った。後半に入ってから、つぼってるらしいことが横目に見ていてわかりました。」

最終的に志村は、原に１分47秒の差をつけて帰ってくる。早稲田のアンカー馬場は、このメンバーで走るのがもう３回目。金並・志村というスーパースターと自分という構図に必要以上のプレッシャーはなかったのだろうか。

「私は出ざるを得ない状況ですよねえ（３人しかいないから）。１年生の時から出て慣れちゃった（１年生の時は、金並－瀬尾－馬場）。去年は、前の年のいい結果があったので（日光インカレのこと、馬場－志村－金並で６位入賞）、それ以上目指さないといけないので…と思ってたら落ちるだけ落ち込んで。私自身が全てのレースの中でWorst １に入るレースをやってしまった。今年は、去年程はまることはないと思い込んだ。それに春合宿の金並を見てて、もう敵なしだなと思って。あの２人にまかせとけば大丈夫。私がどーのこーのとか言うレベルじゃなくて、自分がどーでも、どうにかなるんじゃないかと思っていた。かえって、あそこまで（金並と志村が）強いと、自分の責任がなくなる。今年は過去３年間の中で特にそれが強くて、私は楽しくやって帰ってこようと。だから今年はニコニコしてスタートした。みんな私を見てて『今年はいけるな』と思ったとあとから言われた。（馬場亮子）」

走順は、昨年の全く逆になっていた。昨年馬場は１走でつぶれたのである。

「走順は、去年の反省があって。１走がつぶれるとダメだから。女子は逃げ切って勝つのがスタンダード。とにかく逃げ切ろうと。

春合宿でも10分前に出してもらって追いかけられる練習もした。人がいると動揺するけど、まわりが10人もいることはない。トップでもらうと思ってたんで、自分のレースができることが予想できた。（馬場亮子）」

この馬場を追って、静岡大・金田が出る。会場にいる人々の多くは、この時点で静岡の優勝を確信したことだろう。

「3走で待ってる時は、楽しみでした。別に緊張とかはしませんでしたね。去年とかよりずっと楽でしたね。去年は初めてだったし。気分的にはいい方、いい方、いける方向に考えていた。それが漠然としていたのが、いけなかったのかも知れませんでしたけど。（金田収子）」

金田は①番で馬場に追いつく。馬場は、金田に声をかけたようだ。

「『がんばろうね』って言われました。『あっ、はぁはぁ…』とか言って…。（金田収子）」金田は相当びっくりしたようである。

「静大に追われるのわかってたんで、まず地図だけは間違えちゃいけない。私の好きなコース。これなら、ゆっくりやればなんとかなるかも知れない。①までは慎重にやった。でも①でヤブにつっこんでて、バキバキ抜けたらもう金田さんに追いつかれて、でもどうせ追いつかれるなら早い方がいいや。でもそこからコースが違うみたいで全然会わなかった。一人でたんたんとやっていて、楽しもう楽しもうとやっていた。じーっと考えて、ピタッと止まってって感じで。（馬場亮子）」

中間ラジコンは、金田が2分程度リードして通過。会場では金田の逆転が初めて伝えられる。静大優勝への確信は、ますます強くなる。

「中間の放送聞いた時に、ああ馬場さんがんばってるなと思いました。（早大・志村聡子）」

馬場が大きく崩れることもなく健闘を続け

入賞圏内へ順位を上げた筑波大・山下選手
後ろは個人戦5位広島大・稲村選手

ていることに早大関係者は満足していたようだ。うまくいって、このまま2位で逃げきれれば…むしろそんな期待を抱いていたのではなかろうか。

馬場が再び金田を見ることになるのは⑥番ポストのあたり。

「（①で追いついたあと）②、③全然会ってないし、全然ポストが違うのかなと思って、中間とかもどっちが先かよくわからなかった。⑤→⑥、なんかいやなポストだな。歩測はやってたんですけど、いつの間にかわかんなくなった。たぶん妙に落ちついてて、ちゃんとやらなきゃーとか思ってちゃんと止まってプランしてって、手順はふんでたんですけど、もしかして今一番先頭走ってるのかなと思ったりして。それが悪かったのかもしれない。抜かれただろうなーと、ぼーっと考えていたもしれない。早稲田のトリムを見たとき『あっ、やっぱり前にまだいるじゃん、あらら…。』（金田）」

「中間越えたあと、尾根に登ったらそこでまた金田さん会った。『えーっなんでこんなとこにいるの。』当然もっと先に行ってると思ってたので。目があってニコッとして、だーっと彼女は斜めに降りていった。『あーっ、やっぱりＮＴ選手は速いわ。』私は、まっすぐ降りていった。（馬場）」

ちなみに、金田はＮＴ選手ではないが（金並や志村がＮＴだから、先入観でそう思い込んでいるのだろう）、それはともかく、馬場が目があってニコッとしたのを、金田は再び声をかけられたと錯覚したようだ（馬場は⑥では声はかけてないと断言している）。①で声をかけられたことに動揺があったのだろうか。

「⑥でも向こうから言葉をかけられて。『はい』って言って。びっくりしました。結局ゴールしてから思ったんですけど、そういう余裕みたいなのが自分ではなかったんじゃないかと思いました。声をかけられた時は、負けたとは思わなかったけど、なんか違うと…。びっくりしましたホントに。4年生になるとそういうものか…。（金田）」

さて、このあと金田は再びミスを犯す。相方、知らない間に再び馬場は金田を逆転していた。

「ラスポとって一安心。キョロキョロと見て、前にも後ろにも全然人がいない。金田さんは相当速く行ったんだな。後ろ見ても広大もいないんで、つぼってもないから抜かれてもないな。まあ、2位でいいか。よくやった。誰もいないから普通に走って。下りだし、あー気持ちいいな。（馬場）」

会場では、ウイニングランの準備をして旗をもった静岡大・中野選手と原選手が速報ボードの前に控えている。しかし、帰ってきてよさそうな時間になってもアナウンスがない。少々不安気な顔。「大丈夫だよ…」とまわりの声。そこへ飛び込んできた実況放送はしかし、誰しも予想しなかった意外な結果だった。

「全く予想してませんでした。可能性はなくはないとは思ってましたけど、普通にいけば金田さんの方が先に帰ってくると思っていたんで、テントでテーピング取ったりしてました。瀬尾さん（早大ＯＢ）が叫んだんですよ。『しむらーっ』って、それで、すごいうれしそうな顔してるんで、それでまさかって思ってすぐ走っていきました。（早大・志村）」

さて、金田は、

「⑩で道を曲がると、⑩が見える曲がり角（150 mぐらい手前）から、あれがラスポだと分かった瞬間に一緒に（馬場選手が）見えました。やっぱり前にいたかと思って。冷静に考えると抜ける距離じゃないのに、でも抜けるかなと思いました。でもチラッとこちらを見たんで、あっ、気づかれたと思って、でも、もしかしたら抜けるかもしれないと思っ

1走トップ北海道大・酒井選手

5位から3位へ順位を上げた
日本女子大・寺澤選手

た。（金田）」

馬場の姿が会場の視界に入ってくる。

「会場に入って、曲がる角に誰かがいて『優勝だーっ』って叫んでいて『えーっ』最後で抜かれたらいやだと思って。そこで初めて欲が出て、ここで抜かれたくないと思った。（馬場）」

早稲田大学の校旗をもって、金並・志村が迎える。感動のウイニングラン。

「もう、何にも考えてませんでした。すごい気分良かったです。（志村）」

金田が追う。

「必死で走りました。だんだん観客が増えてきたと思ったら、ウイニングランが見えて、あそこはもうゴールなのか…。（金田）」

ゴール脇に陣取った早大ＯＣ陣。クラブのみんなに囲まれて金並・馬場・志村が泣きじゃくる。最後のインカレ。最後の団体戦。３人の歴史は３年間の闘いに劇的な幕を閉じた。

「私が遅いことを誰もとやかく言うんじゃなくて。去年も２人とも一言も文句言わなかった。それがかえってつらくて…。他の大学だと、もしこいつを出したらメダルを取れたんじゃないか、というのがありますよね。春合宿ではまった時、私がいじけて泣いていた姿を見て、『先輩つらいんでしょうかねぇ』って心配してくれているというのを春合宿の最後の日に知って、すごい感動した。本当なら私が後輩を心配する立場なんだけど志村がそういうこと心配してくれてて感動。考えてみればすごく恵まれている。私と同じ実力の人、他大にもいっぱいいる。でも優勝の見えるところにいる人って何人いるだろう。それにも感動。インカレの５日ぐらい前にいじけていたというのを監督から聞いてだと思うけど、Ｙｕさん（宮川達哉早大監督夫人のあの、宮川祐子さん）に電話で言われた。『結果はどうであれ、最後のインカレ出てから10年たってしまうと、すべてが楽しかったいい思い出だから、おもいっきり楽しんでらっしゃい。』で帰ったら、押し花電報あった。また感動。（馬場亮子）」

カギとなった馬場亮子。感動につつまれたインカレだった。

静岡に遅れること、わずか50秒。植田の快走で広島大が３位。昨年の優勝を含む３年連続の入賞。そこから５分強遅れて４位筑波大学は、昨年と同じ順位。４連覇を狙った昨年は４位に泣いたが、今年は４位に笑った。併設クラスでも１・２フィニッシュを決めた筑波大女子。層の厚さでは今でも全国No.1だろう。若い選手の成長もあり、来年に期待がかかる。筑波大女子は、インカレ有史以来の連続６位以内入賞記録を更新した。実に16年連続。男女併せて、この偉業を続けているのは筑波大女子のみである。５位には昨年と同じく京都橘女子大学が入った。展開も昨年と似ており、アンカー高木貴美江の快走で、11位で受けたタッチを５位に上げている。高木選手のタイムは50′02″。昨年は相模女子大・奥山陽子に次ぐ２位の区間タイムだったが、今年は津田塾大学・千葉あかね（47′14″）、北海道大学・酒井佳子（47′20″）、早稲田大学・金並由香（47′42″）広島大学・植田佳子（49′19″）に次いで５番目のタイムである（但し、コースパターンは各自異なる）。６位には日本女子大学。２走の寺澤理香が快走をして３位に上げ、アンカー岡部直子が有力校の追い上げにもまれながらも入賞圏を守りきった。

全区間トップのタイムを出した、千葉あかねのいる津田塾大学は、１走の出遅れなどもあり最終的には12位。トップからの差が23分42秒である。ちなみにこの差は、一昔前なら（少なくとも４年前の埼玉インカレの頃までなら）余裕で６位入賞を果たせたタイム差である。記者の手元には16位までの資料しかないが、16位の東京女子大学でもトップからは30分強。やはり一昔前なら、入賞を果たしている。入賞圏がトップから10分台にまで縮んできたのはここ数年のこと。女子学生界の全体のレベルは著しく向上した。これは地方国立大学の躍進とともに、ここ数年の非常に大きな特徴であり、時代の流れである。このテーマについても来月号で特集したい。

抱き合って喜ぶ早稲田女子チーム
左から、志村・金並・馬場の各選手

静岡大、２走原からアンカー金田へ

	１　走	２　走	３　走
１．早稲田大学	金並　由香 ②　47′42″ (CY)	志村　聡子 ①　1″40′04″ (BY)　52′22″	馬場　亮子 ①　2″39′18″ (AX)　59′14″
２．静岡大学	中野　宏美 ③　50′39″ (BX)	原　志保子 ②　1″41′51″ (CY)　51′12″	金田　収子 ②　2″39′46″ (AY)　57′55″
３．広島大学	三明　晴美 ⑩　58′02″ (BY)	稲村　仁美 ⑦　1″51′17″ (AY)　53′15″	植田　佳子 ③　2″40′36″ (CX)　49′19″
４．筑波大学	片岡由起子 ⑪　58′29″ (AY)	山下　和子 ⑥　1″51′14″ (CY)　52′45″	坂元　祐子 ④　2″45′55″ (BX)　54′41″
５．京都橘女子大学	橋本　かよ ㉑　1″04′40″ (AX)	鳥羽　都子 ⑪　1″59′25″ (BY)　54′45″	高木貴美江 ⑤　2″49′27″ (CY)　50′02″
６．日本女子大学	石川　律子 ⑤　55′12″ (AY)	寺澤　理香 ③　1″48′39″ (BY)　53′27″	岡部　直子 ⑥　2″54′33″ (CX)1″06′06″

団体戦女子入賞校の各走者タイム

東大・東北大の壁は厚く
３年連続の３位京都大

関東の新興勢力東工大
（２走・根本選手）

今大会の影の主役北海道大
来年真価が問われるか

優勝者のプロフィール

プロフィール

①生年月日・年齢・血液型
②ＯＬ歴・初めて参加した大会
③主な戦績
④これからの目標
⑤ＯＬ以外の趣味
⑥大学での専攻

金並由香（４年）

①1971年12月４日・22歳・Ｂ型
②４年・須山口のワンダラーズ大会
③今回のインカレの優勝ぐらい
④Ｄ21Ｅでまともな成績をコンスタントにだせるランナーになる
⑤読書・散歩
⑥文学科日本文学専修（しかし『行幸田』を「ぎょうこうでん」と読んでいた私）

馬場亮子（４年）

①1972年１月15日・21歳・ＡＢ型
②４年・朝日大会『矢板』
③92インカレ個人戦20位
④極楽オリエンティア
⑤食べること
⑥心理学

土井聡（２年）

①1973年９月24日・20歳・Ａ型
②２年・ＦＴＶ大会
③関東学連リレーＨＥ一走トップゴール
早稲田大会ＨＥ12位
④ユニバ出場
⑤ぼーーとすること
⑥工学部化学

高島和宏（４年）

①1971年７月22日・22歳・Ｏ型
②４年・ＦＴＶ（福島テレビ）大会
③Ｏ－ＣＵＰ93Ｈ21Ｅ２日間総合８位
APOC92Ｈ19－20Ｅ２日間ショート２位
④第２回ショートインカレを成功させる
T.A.として東北大OLC をＶ２に導く
⑤スキー
⑥生体情報学

入江崇（３年）

①1972年11月25日・21歳・Ｂ型
②３年・福島市ＯＬ大会
③世界選手権ショートＣファイナル12位
④次の世界選手権（ドイツ）のクラシカルで鹿島田さんに勝つ
⑤走ること
⑥物理学

志村聡子（３年）

①1972年12月25日・21歳・Ａ型
②６年・東大大会『道元平』
③93関東インカレ優勝他
④今は考えていない
⑤なし、ＯＬ一筋
⑥自然地理学（平野・河川）

安斎秀樹（４年）

①1972年２月６日・22歳・Ａ型
②８年・全日本大会（岡崎）
③ＩＣ92ＨＥ11位
④ユニバのリレーで一人でもぬくこと
⑤走ること
⑥地理学

完璧な準備→大差の勝利

入江　崇

今回のインカレの準備は完璧だったと思います。去年のインカレはレースで緊張しないことがまず第一の目標だったため直前までへらへらしていたので、なおさらそう思えるのでしょう。トレーニングは量・質とも今の自分で満足できるだけのことをしたし、酒も控え、栄養にも気を付けました。試験が明けるとすぐ朝型の生活になおし、直前の調整にはかなり気を使いました。雪の積もった日など走りだすことをためらうこともありましたが、そういうときに部の仲間のトレーニングする姿を見るととても励みになりました。部員のみんなには感謝しています。自分ではやれるだけのことはしたと思うことができました。

ここまで順調に行くと優勝の２文字はおのずから頭の中に浮かんできます。ずっとこのことから逃げないようにしてレースに挑むつもりでした。他人から心境を聞かれたときも、今年は狙っていくと答えていました。ところが直前になってふと思ってやっぱり謙虚な気持ちでインカレを迎えようと心を切り替えました。これがレースにどう影響したか分かりませんが、いい選択だったと思っています。

普通に走れば他の選手より２～３分は早く回れると思っていたので、当日はゆっくりでいいからとにかくミスのないレースをするつもりでいました。結果的には２位と10分近い大差がつきましたが、レース中はもちろん一度も勝利を確信することはありませんでした（心の中では常に大丈夫と言い聞かせていましたが）。細心の注意を払ってアタックした⑤番コントロールで２分近いミスをしたときは、これでだれかにトップに立たれてしまったかもしれないと考えもしました。その後は大きなミスも無くまとめたのでよし逆転できたと思ったのですが、最終コントロールで中途半端に地図を読みすぎていたのかテープ誘導とは逆の方向に走り出してしまい、このタイムロスで負けたら泣くに泣けないなとゴールまで必死でした。会場に入る少し前で山形県協会の武石さんが「ゆーしょーだ！ゆーしょ」と声をかけてくれ、ゴールレーンでみんなの笑顔が見えて勝利を確信しました（スタート順がシード選手の中で最後だったのでゴールする時点でほぼ順位が決まる）。優勝が分かった瞬間の気分の良さは何ともいえませんね。

ところでオリエンテーリングは自分がきちんと速くなっているのが実感しにくい競技だといつも思うのですが、今年もインカレでは、少しは成長しているんだということをはっきり示してくれました。一つは、今回は必要なところではほとんど歩測をしていたということです。一年前の滋賀インカレでは歩測はたった一度しか使わなかったのに。もう一つは、滋賀では全くしなかった次のレッグ以降の先読みを自然にしていたことです。さらにうれしいことに、団体戦の４走ではていねいすぎるくらい確実に走って生まれて初めてノーミスのレースができ、まだまだスピードアップできるというポテンシャルを感じることができました。こういうできるだけ大きな達成感を得たいから（あるいは自分の未熟さを知りたいから）インカレには真剣になれるのかもしれません。

⑪をチェックする入江選手

さて来年はもちろん２連覇したいですが、まだ具体的にどういう風にインカレに臨もうかイメージが浮かばず、最近ちょっと走るのがつらいです（３／31現在）。これがＶ２の難しいところなのかもしれませんね。

悔いのないレース

金並　由香

去年のインカレでの早大ＯＣの成績は、はっきり言って良くなかったと思う。個人戦に関して言えば、私のレースでのまぬけな山越えは多くの人の知るところである。最も速いルートを見つけることのできなかった私は馬鹿以外の何者でもなかった。しかし、私の気持ちをこの群馬インカレ向けさせたのは個人戦での情ない結果ではなく、団体戦における早大ＯＣの成績、レースの様子であった。

「努力をしても勝てなかった。やはりインカレは（他のレースとは）違うんだ。」岐阜インカレのあと、何人かの人がそのような言葉を吐いていた。ほんとにそうなのか。インカレは特別なのか。ＯＣのメンバーの努力はどこにも負けていなかったか。私はそうは思わなかった。けれど、それをうまく皆に伝えることもできないように思えた。だからインカレの次の火曜日からトレーニングを始めた。最後のインカレに向けて悔いの残らぬレースをするために、できるだけの努力をしようと思った。

走ったとはいっても、火曜、水曜とあとは日曜日のレース以外は特になにもしていない。秋まではほとんどレースもしていなかった。秋もこれといってよい成績はない。シード選手に決まったとき主な成績を聞かれて「実はなにもないですね。」と言われたほどである。ただ、あせりとかはなかったと思う。今振り返ってみて不思議なくらいそのような感情はなかった。

12月にニュージーランドに遠征した。これはオリエンテーリングの楽しさを再度感じるため、インカレに向けてのものでもあった。この遠征で得た大切なことは、現在地がわからなくなったら近くの特徴物まで走るかわかるところまで戻るということ。あたりまえのそんなことだがそれまで私にはそれができていなかったのである。あと、じつは自分の技

術力はたいしたことはないと認識したことも遠征の成果の一つであった。

1月はこれといったレースもなく過ぎ、2月の関東インカレ団対戦で結構走れるようになったと思ったものの、全日本リレーでは10分もつぼり、自分のふがいなさに泣けた。その後ＯＣ大会の運営で風邪をひき３日間は寝こみ、そのあともずっと風邪気味で辛かった。風邪にだけは気をつけていただけに体力が落ちてしまうことが心配で、自分は走れるのかどうか不安だった。だが、練習会、春合宿と納得のいく走りができ安心した。

早くインカレが来て欲しいような、早すぎるような、何も手につかないようなまま、インカレ前の何日かを過ごした。始まってしまえば早かった。午前中に少しトレコースに入り、開会式。宿舎を見て寂しさを感じて伊香保の街をぶらぶらして、東大の人やＯＣの人と上の神社に参った。「どうか皆が良いレースができますように。楽しいインカレになりますように。」御利益はあったのかどうか。

開会式の夜、要するに個人戦の前日、私はなんとなく嬉しいような、楽しいような気分でいた。スタート順の抽選でシード選手の１番をひき（その前のくじをひく順を決めるときにも１をひき）冗談で、明日も１位だ、などといっていた。けれど、別にねらっていたわけでもなかった。ただ一年の総決算として納得のいくレースをすることだけが目標だった。実はひそかに２位の会に入れたらなーとは思っていたのだが。

当日は、８時半に朝食を取ることにして、起きてからそれまでＯＣの団体戦メンバーに渡されるＴシャツの仕上げをしていた。朝食のかぼちゃのオレンジ煮にいささか気分を悪くしていたものの、いい気分でバスに向かう。雨が降っていないのがなにより嬉しかった。バスストップで降りてＯＣの人たちのいる所に行って荷物を置きアップを少ししてテーピングをしてもらった。一度皆で紺碧の空を歌った。ＯＣここにあり、といった感じがして楽しかった。けっこう寒いのでトリムの下に長袖のポリプロのシャツを着た。スタート時刻の25分ぐらい前に待機所からスタート地区に向かった。千葉大の本間さんと話しながら軽くジョグ。テーピングがきつかったので取ろうかと思うが時間がなくあきらめる。同時スタートの東大の桜井くんとスタート枠へ。去年の個人戦のことなど話しながら歩いた。

枠の中に入ったとき、なんともいえない複雑な気分だった。やっとこの日が来た、とうとうこの日が来てしまった。レース直前に思ったことは、「この日のために一年間努力してきたのに、それを無にするようなレースだけはしない。」だった。１分前のチャイムでスタートへと走り出す。白図をみて「大味な地図だな。」と思った。そしてスタート。地図を見て、桜井くんと二人して「ゲッ」と言ってしまった。見事なまでに尾根をトレースしていくコース。コンパスをあわせて走り出す。①番にいく少し手前まで桜井くんが前を走っているのが見えた。②番までは尾根をひたすら走る。けっこうきれいなテラインで走りやすかった。②→③は、いっきに西の沢におり、道を走る。このとき左手にコントロールがみえ、「ああ、湧水点においてあるんだな。」と考え、歩測して適当なところで道からはずれて川を越え、目標とする沢にはいる。思ったより沢が狭かったのですこし不安になるが、ここに間違いないと思い沢をつめる。あった。③→④は、尾根を切って向こうの道へ行くか、道をそのまま回るか考えたが、たいしたアップでもないので尾根をきった。④の尾根のかなり下でとりついて尾根線にそってチェック。ここで３人くらい選手がルートを考えていた。私も地図をみてどういこうか迷った。尾根にのって、尾根をトレースするか、それともそのまま東方向に進み尾根ぎりのルートをとるか。④から東南に沢をつめながら考え、結局前者を選んだ。私の好きなテクニックを使うだけで良いのと、登ってしまえばあとは下り調子だったからである。⑤→⑥では林道への脱出のとき失敗した。カーブの手前におりてしまったのである。途中で気がついたが仕方無いので道にでてからがんばって走った。⑥へむかう尾根の上の人工特徴物が小さなお地蔵様だったのには驚いた。誰がつくったんだろう、と思いつつ、いつもの癖で「お邪魔します。」といって通りすぎた。私はレース中に墓やほこらなどのわきを通るときつい挨拶をしてしまう。お地蔵様のいたピークからコンパスをセットして歩測しつつアタック。⑥→⑦、４、５人が見えた。広い沢を横切り尾根にのる。少し上めにでてしまうが、尾根の曲がりと植生界の様子をみてアタック。⑦→⑧、コンパスをふって道へ出る。沢を越え道の分岐で、他の何人かが尾根に登りだしたが、少し迷ってやはり送電線の下の道を使うという初めのプランでいく。登りは歩いてしまった。でもこれが今の自分の全力だな、と情ないが思っていた。送電線から下りきったところでコンパスをふり、地形をみながらアタック。⑧→⑨、道を走って尾根線に出る。このころから「ああ、もうすぐレースが終わってしまう。」との思いがこみ上げてくる。尾根線上から⑨番へコンパスをセットしながら「もうおわっちゃうよー。」と呟いてしまった。「尾根を２つ越えます。」と声にだして直進を始めた。「１つめ」、「２つめ」。⑨番の尾根にとりつき駆け降りてチェック。ここでオリエンテーリングは終りであとは道を走るだけ。少し前にＨＥの人がいた。⑩番をとり、あとは走るだけ。「おわっちゃう。」走りながら泣きそうだった。時計をみると62分ぐらい。レース中もウィニングタイムを気にしながら走っていた。どうやら65分はだせそうなので、ひとつ目標は達成できるとホッとした。なんだか矛盾している。

⑪をチェックする金並選手

ゴールレーンを全力で走りきった。63分ぐらい。実はこれはウィニング60分ぐらいでくるかな、と思っていた。走りおわったらいっきに涙が出てきた。「おわっちゃったよー」といって泣いていたら、珍しい奴と言われてしまった。落ち着いたらすぐにダウンをした。明日も大切なレースが待っている。気持ちはもう明日に向いていた。

自分よりあとのスタートの選手を待っていたらだんだん欲もでてきた。もしかしたら優勝できるかも、と思いだしたのは酒井さんの中間のタイムを聞いてから。確定したときＯＣの人達が胴上げしてくれて嬉しかった。

一年間の努力が結果となった自分は本当に幸せ者だと思う。４年として最後の個人戦で優勝できた。目標は「悔いのないレース」。ベストレースであったとは思わないが、自分なりに良いレースができた。努力すれば報われることもある。なにもしなければそれだけである。必ず報われるわけではないからこそ、努力することは大切なことなのであろう。ほんとにインカレは楽しかった。このようにひとつのことに打ちこみ、それに泣き、喜ぶことがこの先どれほどあるだろうか。インカレに向けて努力しただけ、しなかった人よりインカレを楽しむことができるのだと思う。努力を無駄だと思わないで欲しい。私はあのレースの結果がもし違うものであっても「やれるだけやった。よくやった。」と自分に言えたと思う。卒業する今、これからはインカレを支える側にまわって、がんばっていきたい。

最後のインカレ、３人で勝った！

金並　由香

去年のインカレの団体戦の表彰式をなんともいえない気持ちで見ていたことを思い出す。不完全燃焼といった感じであった。

早稲田女子は馬場、志村、そして私の３人でインカレの団体戦選手権クラスを走れるちょうどの数だった。馬場とは４年間一緒に走った事になる。他の人数の多い大学のように団体戦のメンバーになるための選考などはなかったが、３人というぎりぎりの数でやっていくのはそれで難しい面もあったと言える。１人欠けてもチームは成り立たないのである。走らざるを得ない、そのようなところも少なからずあったのだと思う。

ＨＥのスタート。すこしどきどきしてくる。早稲田ガウンを着てスタート地区に向かう途中、宮川監督に「志村をお願いします。」とたのんだ。インカレの特別な雰囲気がしてきた。レーンの脇に馬場がいた。レースに不安はなかった。やるべきことをやろう、そうくり返した。これが最後の団体戦、そう思うと泣きそうになった。地図をもらったらいっそうその感情がつのった。「ちゃんとアップしろよ。」と馬場に声をかける。馬場が笑っていた。今日は良いレースができそうな気がした。３人とも。

スタート。すぐに地図を開く。１番は植生界。簡単なコントロール位置だった。スタートフラッグからどういくか決めて、地図から目をはなし走る。羽鳥さんが手を振っているのが見えた。地図置き場の手前でほとんどの人を抜き、前に出る。スタートフラッグをすぎた時点で前に見えたのは３・４人。北大の酒井さんと静大の中野さんは判った。静岡は違うコントロールだったらしく行ってしまった。酒井さんと同じコントロール。学習院の下川さんもいた。①→②、酒井さんが前を走っているのがずっと見えていた。しかし北大は前にいても問題はないだろうと思っていたので冷静でいられた。②番の沢に酒井さんが先に入るが、私のほうが先にコントロールにつく。彼女もすぐに見つけてチェック。②→③、どうやら酒井さんとは違うコースらしいことがわかった。尾根にのぼり、植生界にそってアタック。③→④は道に出て西に走った。酒井さんはそのまま下に降りたらしい。④までは一人。彼女が先かどうか気にしないようにした。④はラジコンで、会場の志村と馬場にいったい何位と放送されたのか少し気になった。ただトップに近いところにいるという自信はあったのであせりはまったくなかった。次にひかえているのはなんといっても志村大先生である。④→⑤、やっとテクニカルなコントロール位置。道の分岐からコンパスをセットしていたら後ろから酒井さんが追いついてきた。直進。ほぼ同時にチェック。⑤→⑥は私が先に走り出したものの、南のやぶい沢に落ちてしまい酒井さんがかなり先にとって走っていった。すぐに尾根にでて⑥をとった。⑥→⑦、道を走り太い道にでて、目の前の大きな尾根を越える。のぼりながら、「ああ、ここはみゆきだの真ん中あたりの例の渡河点だ。」とわかった。事前に地図を見ていて唯一レース中に役にたった事であった。深い沢をわたり、崖と崖とのあいだを上る。急な斜面だった。目の前に⑦番コントロールがでてきた。酒井さんが先にとって走り出していくのが見えた。⑦→⑧では、前をいく酒井さんの体力に感心していて、さすがに月に200 キロ走るひとは違うな、などと考えていた。⑧→⑨、コントロールの位置が違ったようで、⑨をとって道にでようとしたら彼女が目の前を走っていった。「これはもう追いつけないな。まあ、いいか。」と思う。⑨→⑩は道走り。頭のなかで、ドリカムのWinter Song がまわっていた。前日に宿で馬場のＣＤを見ながら歌っていたのがでてきたのだろう。まじめに走っていたつもりではあるが。⑩→ゴール、下りで助かった。酒井さんは速い。みんなの応援が聞こえた。志村が明るい顔で手をあげていた。「自分の役は果たしたな。」とその顔を見て感じた。タッチのとき「真ん中の渡河点」と叫んだ。志村ならわかると思ったから。

酒井さんと「楽しかったね。」と言って笑った。馬場から、志村が「予定通り。」といいながらでていったと聞き安心する。テラインの様子、まわしかたなどを馬場に伝えた。中間で静岡に少し差をつめられていた。でも信じていたから良いレースをしていることだけを願った。最終ラジコンのコール。馬場に「予定通り。春合宿といっしょだよ。良いレースして笑ってゴールだよ。」と繰り返した。志村がゴール。笑って「タイムはいまいちだけど気持ちよく走った。」と言っていた。それだけで嬉しかった。あとは馬場だけ。

中間で金田さんとほぼ同時と聞いたとき涙が出てきた。良いレースをしているに違いない。そのままの調子で帰ってきてくれるだけでいい、そう思った。はっきりいって優勝なんて考えてもいなかった。

瀬尾さんと白いボードをじっと見ていた。静岡もうちも中間を過ぎてかなり過ぎていた。もしかして後半でつぼったか、心配だった。そしてボードに833 と書かれた。次に書く様子がなかったとき信じられなかった。「１位、早稲田大学はウィニングランをー」放送が聞こえた。志村と走って本部に行った。馬場を待っている間、志村はずっと祈るような格好をしていた。私は旗を持って馬場のかえってくるほうを見ていた。「大丈夫、大丈夫」と志村に、自分に言っていた。馬場が見えた時を忘れることはないと思う。「全力で走れー」と言いながら、ウィニングランをした。

３人ともが気持ちよく走れた。走り終わって笑うことができた。目標は達成され、結果もついてきた。私たちは幸せ者だ。ＤＥは３人がまとめたところが勝つ、そう思いかけひき等はほとんど考えなかった。じつはオーダー表にもほとんど目を通さなかった。（３人とも）最後だと思う気持ちが良い方向にはたらいてくれた。３人の力でとった優勝は本当になににもかえがたい宝物だと思う。馬場に、志村に、ＯＣの人々に、インカレを運営してくださった方々に、すべてのひとにお礼を言いたい。来年もインカレを走ることのできる学生は１年間またがんばってほしい。本当に４年間楽しかった。

早稲田大２走・志村選手

インカレ史上最速（？）のウイニングラン

東北大学代表選手一同

余裕の東北大１走・高島選手
レース中、カメラマンにＶサイン

「土井って誰なんだ？」そう、誰もが抱いた疑問だと思います。東北大には松澤もいるし、清水だっている。それに２年連続して団体戦ＨＥに出場していた高橋政喜の名前もオーダー表にない。いったい東北大はどんな選手選考をしていたのであろうか。一番気になるこの点についてオフィシャルである小山博史氏は、「一応、私ともう一人のオフィシャル菊池正昭さんと立候補した選手みんなで話し合って決めました。土井が選ばれたのはこの秋からの成長が著しく、今一番のっている男であったことです。それに土井は緊張しないですし。」と語る。どうやら東北大はその時の勢いで決めてしまったようである。では走順は？「とにかく入江を４走に持ってくれば後の３人は気楽に走れるという考えでした。」確かにその通りかもしれない。実際入江本人も「卓弥さんとなら３分まで余裕で逆転できますよ。」とＯＣ大会前に発言している。

では、どんな作戦でいくつもりだったのか、エースの入江に聞いて見た。「まず速くはないけれど安定感のある高島さんがトップグループの後ろぐらいで帰ってきて、２走の土井が遅れてもいいからとにかく安斎さんにつないでくれれば良いと思っていました。そうすれば安斎さんはきっと東大４走の背中が見える位置で僕に渡してくれる。後は御想像の通りです。」この発言からも分かるように入江は素晴らしい自信を持っていたようである。

当日の東大のオーダー：野中－山本－桜井－鈴木についてオフィシャルの菊池氏は「まったく予想通りだった。」と語る。しかし前日の個人戦を見ると、東大が桜井２位、鈴木６位、山本８位、野中16位に対し、入江１位、安斎３位、土井17位、高島51位である。東北大はこの他に松澤の４位、野田７位という好成績であった選手がいたが、オーダー変更は考えなかったのだろうか。この点について菊池氏は「事前にみんなで大怪我でもしない限り変えないと決めていたし、きっと団体戦ではちゃんと走ってくれると信じていました。」と語る。

こうして事前に決めていた通りのオーダーでレースに望んだ東北大であるが、まず１走の野中がトップゴール、次いで40秒差で東北大高島がゴールした。昨年度優勝校だけあり、東大の貫禄を見せた１走の走りではあったが、両選手ともに「せっかくいなくなったと思ったらまた次のポストでちょこまか現れてくるんだもん嫌になっちゃった。」と、まったく同じことをレース後に話していた。２走では40秒差をもらってスタートした山本がさらに２分の差をつけて３走につないだわけであるが、レース後「③番で土井が現れた時にはびっくりした。」と山本は言っている。そう、一度は土井が山本に追いついていたのであったが、そこはさすが土井、作戦を守りちゃんと遅れて帰ってきた。しかし、「２分も差をつけられたのですか、ちょっと悔しい。」と、シード選手相手に言ってのけるところなどなかなかの大物であるといえよう。多分東大、東北大ともにここまでは作戦通りであったようだが、流れを東北大へと変えた３走安斎は桜井とは顔も似ていれば実力も互角。「急な上り坂を走る以外に桜井と差をつける方法はないと思い、沢切りの急斜面も全て走った。」とは、安斎のレース直後の言葉。それがよかったのか見事な逆転で30秒差をつけて４走入江にタッチ。大歓声の中入江はまじめにやっていないのではないかと思われるぐらいのゆっくりとした走りでスタート。「安斎さんが１位で渡してくれたので、ただ周ってくるだけで勝てると思った。」と、エースだけあって余裕のコメントであった。結局入江崇はノーミスの60分を切る好タイムで走り切り、東北大がインカレ史上最速？のウイニングランで有終の美を飾ったのでした。

これぞインカレ史上最速（？）のウイニングラン
左から、安斎・高島・土井・入江の各選手

オリエンティアのための Medical Advice

OLCレオ　愛場　庸雅

読者の質問に対する回答①：牛乳について

O－JAPAN 1月号の記事を見て，3年前の3月にOL合宿をきっかけに，花粉症のような症状が発症し，2か月ほど悩まされたのを思い出しました。幸か不幸か，その後OLの機会が激減したため，その後，今のところは症状は出ていませんが。

ところで，予防のための食事に関する記述のところに，牛乳のとり過ぎは良くないとありますが，骨を丈夫にするためのカルシウム補強の手段として，牛乳が推奨されている記述もよく見かけます。こういった功罪を考える時，個人差もあるとは思いますが，適切な摂取量とは，一体どのくらいなのでしょうか。また，1～3才の幼児には，1日に約 400ccの牛乳を与えるよう，育児書や保健婦さんに推奨されていますが，幼児と大人は違うのでしょうか。

ママさんオリエンティアも増えていますので，O－JAPAN 誌上でご回答ください。

［神奈川・和田美千代］

第1回の花粉症の話に関して，上記のような質問が寄せられましたので，それについて回答したいと思います。私にすれば「よくぞ聞いて頂いた」という気持ちです。

おそらく多くの方が「まさか」と思われるでしょうが，結論から言いますと，大人も子供も牛乳を飲む必要性は全くありません。「えーっ，そんな！　牛乳はカルシウムをたっぷり含むし，蛋白質，脂肪を多く含んだ完全栄養食品と言われてるではないか！」と言われると思います。実はこの牛乳信仰ほど，現代の迷信になっているものはないのです。最近徐々に，いろんな面から牛乳の問題が指摘されはじめていますが，その概略をお話しましょう。

・牛乳はウシの赤ん坊の飲み物

まず原点に帰って考えてみましょう。牛乳は本来，ウシの赤ん坊の飲み物だということです。これは，ウシの赤ん坊が飲めばまさに完全栄養食なのですが，ヒトの体とウシの体は，消化，吸収，代謝の面で事情が違います。これは大人でも子供でも同じです。ヒトの赤ん坊にとっての完全栄養食は，もちろん母乳（ヒトの乳）です。最近，粉ミルクの宣伝を見なくなったと思いませんか。粉ミルクは牛乳をもとにして作られるのですが，実はWHO（世界保健機構）では，既に「粉ミルクを摂取するのは望ましくない」と勧告をしているのです。

また，牛乳を飲むと下痢をするか，しないまでもお腹がゴロゴロするという人も多いでしょう。これは牛乳中の乳糖を分解できないために起こる症状なのですが，考えてみれば食中毒と同じ症状で，体に悪いか不要なものが入っているというサインです。本来ヒトの摂る食物ではない証拠です。そして勿論これは，乳製品全て（バター，チーズ，ヨーグルト，アイスクリーム…）同じです。

「そんなことを言ったって，ヨーロッパをはじめ，世界各地でウシやヤギやその他の動物の乳を飲んできたではないか。」と思われるでしょう。しかしこのような乳製品を摂る習慣のあるのは，実は寒冷地に住む人や，乾燥地に住む人であって，少なくとも日本人が昔から飲んできたものではないのです。これは穀物の育たない地域の人が生き延びるために食べた，代用食の一つなのです。

・栄養の面から再検討すると

まずはカルシウムについての問題からいきましょう。カルシウムが不足しており，より多く摂取することが勧められているのはよくご存じと思います。ところで，約40年前と今を比べてみますと，牛乳の消費量は飛躍的に増大しているのに，カルシウム不足の代表的な病気である骨粗鬆症の人の数はますます増えているのです。つまり昔の人は，牛乳を飲まなくてもカルシウムは多く摂っていたのです。これがなぜかは後で述べます。一般には「牛乳＝カルシウム」と思われているようですが，牛乳から摂ったカルシウムは，消化，吸収される効率が悪いのです。同じ量を摂ったとしても，吸収されなければ何の役にも立たないのです。カルシウム以外の栄養素についてみても，例えば牛乳で下痢をするのは2才以上のヒト（日本人は特に）には乳糖分解酵素が欠乏しているからですが，このように一見牛乳に含まれる栄養素を摂ったようでも，それは必ずしも消化，吸収されて役に立つものではありません。それどころか消化の悪い蛋白質は，一部そのままの形で腸から吸収され，これはヒトにとっての異種蛋白質ですので，各種のアレルギーやアトピーの原因になるとい

われています。また牛乳中の蛋白質であるカゼインは接着力が強く，各種の栄養素と結びついてしまって，その吸収を阻害し，価値を下げてしまうのです。

・安全性の問題

次に質の問題に移ります。食品添加物等に気を使っている人も多いかと思いますが，少なくとも現在市販されている牛乳の多くは，その質に問題があります。まず牛は放牧されているのではなく，牛舎に閉じ込められっぱなしで運動不足です。そして病気を予防するために抗生物質を，早く乳を出させるためにホルモン剤を投与され，健康な生き物である牛ではなく，まるで牛乳を取るための機械のようです。与えられるエサはと言えば輸入ものの農薬のたっぷりかかったもので，これを牛が食べ，その牛から取れた牛乳ですので，いわゆる複合汚染が濃縮された形になっています。

もうひとつは加工の問題です。現在大半が 120℃の高温殺菌ですが，これだとわずかに消化，吸収される（役に立つ）蛋白質も変性してしまい，役に立たないばかりか，アレルギーの原因にもなりやすいのです。いわゆるＬＬ牛乳などは最低でしょう。　せめて65℃の低温殺菌牛乳にしたいものです。　　（欧米は大半がこれですが，日本ではシェアの２％とか）

・カルシウムはどうやってとる

牛乳批判はこれ位にして，それではカルシウムは何からとれば良いのでしょうか。先程述べましたように，昔の日本人は今よりも多くカルシウムを摂取していました。それは何から摂られていたかというと，海藻，小魚，緑黄色野菜，堅実類，そして未精製穀物です。すなわち例えば，「玄米ごはんにゴマ塩少々，煮干でダシをとったワカメの味噌汁にほうれん草のおひたし」という昔ながらのメニューは，実はカルシウムがたっぷり入った食事だったのです。またカルシウムを摂る場合にはマグネシウムも同時に摂らないといけないのですが，これらの食品にはマグネシウムは含まれていますが，牛乳にはマグネシウムは殆ど含まれていません。

ところで，カルシウムをいかに多く摂るかよりももっと問題になるのは，カルシウムの体からの喪失を減らさなければならないという点です。カルシウムは，リンを過剰にとっていると，それと拮抗してどんどん体から出ていってしまうのです。ですからいくらカルシウムをたくさん摂っていても，リンをそれ以上に摂っておれば何にもなりません。そして，このリンを多く含むものは，肉類と加工食品，食品添加物です。カルシウム：リンの比率は，ひじきは１５：１，牛乳は１：１，肉は１：３０と言われています。また蛋白質はカルシウムの吸収には必要なのですが，これも過剰になると，余分な蛋白質を体外に排出するのに，カルシウムも一緒に排出されてしまいまう。もう一つ体からカルシウムを奪うのが砂糖です。砂糖を摂りますとこれを代謝するのに伴って，骨に蓄えられたカルシウムが動員され，この一方通行が長く続けばやがて骨がスカスカになる骨粗鬆症になります。リンと砂糖をたっぷり含んだ清涼飲料水や，肉類を摂り過ぎている最近の子供に骨折が多いのは当たり前なのです。

・アレルギーによくない食物

アレルギーと食事の関係についてもう少しお話しましょう。アレルギーやアトピーの人が避けるべき食物はどんなものかといいますと，白砂糖とそれを使用した食品全て，肉類，卵，牛乳とその加工品，果物，コーヒー，アルコール，油物，精製された穀物（白米は米が白い，すなわち粕＝カスです）などです。さらに水分の過剰摂取もよくありません。これらはすべて，アレルギー体質になり易くするか，アレルギー症状を増悪させるかのいずれかに関係しています。どうです，これだけ挙げたら殆ど食べるものが無くなったでしょう。それほど現代人の食生活はアレルギーを産み出すもとになっているのです。しかし残念ながらこれは事実であり，そろそろ「何を食べれば病気が治るか」ではなくて，「何を食べれなければ病気にならないか」というふうに頭の切り替えが必要なのです。

◇

ＯＬ誌上で長々と直接ＯＬと関係のない話を書いてしまいました。私も実は乳製品は好きですし，時々飲んだり食べたりもします。しかしこの牛乳問題は，はじめにも言いましたように，今最も誤解されている点です。このため少なくとも，好きでもないなら無理をして牛乳を飲ませる必要は全く無いことを知っていただきたいと思います。牛乳は，酒，タバコと同じ嗜好品の一つと思ってください。この他にも今までの栄養に関する誤解は一杯あるのですが，またの機会にしましょう。それにしても，全日本リレー大会を走り終った後にいただいた牛乳，おいしかったですねぇ！

参考文献：
島田彰夫
「身土不二を考える」　無明舎出版
丸元淑生
「豊かさの栄養学１、２、３」
「悪い食事と良い食事」　新潮文庫など

オリエンティアのための本棚

第９回：文藝春秋編「チーズ図鑑」　文藝春秋

文：村越　真／カット：早川喜代美

８７年のフランスでの世界選手権の直前、僕と山岸はスイスでニュージーランド・チームのトレーニングキャンプに参加した。今やノン・スカンジナビアの星となったアリスタはまだ１７歳だったし、キャティーもまだ「アイシュクリーム！」って感じの女の子だった。このキャンプを企画・運営していたのは、当時ニュージーランドチームのコーチをしていたスイスのディーター・ウルフだった。宿泊していたのは、ボーイスカウトの山小屋。木造のおんぼろだったが、一応シャワーもついていたし、台所の設備は充実していた。ディターの片腕のアイリーンが「こんなの簡単よ」といいながら、おいしいパンをオーブンで焼いてくれて、パン好きの僕としては感激した。

約１０日続いたトレーニングキャンプで、僕と山岸は、オリエンテーリング技術についての基本的考え方に対する確信を持つことができたし、同じくらいの強さの国々が世界選手権を目指して努力しているという、しごく当り前の事実に気づくこともできた。

最後の晩に、ディターは僕らを自宅に招待してくれた。「スペシャル・スイス・ディナー」、彼がそう言ってだしてくれたのがラクレットだった。スイスのチーズ料理と言えば、フォンデューが有名だが、このラクレットは半円状にきった大きなチーズの塊をヒーターで溶かして、それをじゃがいもの上に載せて食べる。山国スイスらしい料理なのである。この本によればスイスでもとりわけアルプスの間にあるヴァレ地方の特産だそうだ。その他にも、穴ぼこだらけのエメンタールやグリュイエール、アッペンツェラーといったスイスの有名どころが出ている。「あんなガムみたいなチーズのどこが美味しいのよ？」とアイリーンがいえば、「いや、エメンタールこそチーズ中のチーズだ」とディーターが反論していたっけ。アッペンツェラーは、確か８０年のスイスでの学生選手権の時に工場見学にいったよなあ、これはなんと８世紀からの長い歴史を誇るチーズなのだそうだ。

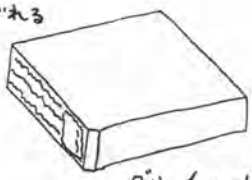
興味深いのは、この本の８割がフランスのチーズの解説に当てられていることだ。この本は２部構成で、一部がフランス、そして２部が「その他」なのだ。それくらいフランスとチーズとは切っても切れない縁にあるのだろう。９０年のワールドカップのレセプションでは、飲物はきりっとした白ワイン、つまみはサイコロ形に切ったチーズだけだった。木造のがっしりしたホールで、なんの挨拶もないレセプションに、チーズだけというシンプルなオードブルがマッチしていた。そのバリエーションや生活への浸透ぶりはもちろん、その味わわれ方において、チーズはもっともヨーロッパ的な食べ物なのかもしれない。

北欧にはあまりページは割かれていないが、イェトストは出ている。ノルウェー独特の山羊の乳から作られたチーズである。チーズというよりも塩気の強いキャラメルのような独特の臭味がある。最初はそれが鼻につくが、慣れると病みつきである。８７年にトロンヘイムのグンナールのところに世話になっていた時に食べた記憶がある。

僕にとって、チーズは常にヨーロッパの思い出とともにあるようだ。自分がヨーロッパでの生活で何気なく接していたものはもちろん懐かしい。そうでないものは今度は試してみたい。今年のスイス遠征の楽しみがまた一つ増えたようだ。

ゴーダ
あらゆるものに向く食卓用。オランダの代表的チーズ

エメンタール
チーズの涙とよばれる光沢を持つ。本文参照。



グリュイエール
チーズフォンデューに欠かせない！

ロックフォール
「チーズたちの王」とよばれる三大ブルーチーズのひとつ

SQUAD REPORT

９３年度エリートポイント最終結果

全日本大会も終わり、９３年度の全レースは終了した。エリートポイントの最終結果につき、別表のとおり報告する。（集計：SQUAD小林岳人氏）。男子８１位以下は割愛させていただいた。

最高得点は、男女とも全日本選手権者の村越真と、木植早生。女子・木植は余裕の１位であったが、男子・村越は、全日本での鹿島田との最終対決の末、１位を獲得した。

男子は、全日本直前の段階で村越が、O-Cup・西日本・早大で各２５点（優勝）を獲得。鹿島田が同様に、静岡大・京葉・千葉大にて獲得していた。村越vs鹿島田の直接対決は、エリートポイント対象レースとしては千葉大大会のみ。このときは鹿島田が勝っている。注目された全日本だが、結局は村越の勝利に終わった。

３位の得点は、広江淳良・菅原琢・竹内藤雄の３名。１２月号、１月号の中間報告ではトップにいた菅原と竹内だが、菅原は終盤に入って、千葉大・早大・全日本などで、年度前中盤の勢いが失速した。全日本も１２位と失敗に終わっている。９４年度のステップに期待しよう。竹内は終盤、参加レースのなかったことが加点を妨げた。広江は、O-Cupから東日本にかけて好調な得点をあげている。（朝日２位、O-Cup・東日本３位）。全日本で５位に入ったことが最終順位を浮上させた。往年のパワーが健在である。

６位、羽鳥は東大大会と朝日大会の優勝が光ったが、終盤は精彩を欠いた。７位、加賀屋も終盤で得点を稼げていない。全日本大会は２４位。過去３年間が５位・７位・５位ときていただけに本人にとっては不本意な成績ではなかろうか。WM選手の８位国沢は、西日本の２位が最高。全日本で１７位とふるわなかったのが残念だ。９位には、樋口一志・佐藤隆徳・富田吉郎が入った。この３人は東日本大会の１位・２位・４位。３名ともこの大会で得点を稼いでいる。

そのあとに鈴木卓弥・入江崇と学生のトップクラスが続く。WM選手でもあった入江は、出場クラスがH19-20Eのため、公認大会の得点を稼げないのが敗因。H21Eに上がる今年は、村越や鹿島田との対決も楽しみである。

男子		女子	
＊１.村越真	１０３	＊ １.木植早生	８２
＊２.鹿島田浩二	１０２	２.高野由紀	７６
３.広江淳良	９４	＊ ２.宮本知江子	７６
＊３.菅原琢	９４	＊ ４.志村聡子	７４
３.竹内藤雄	９４	＊ ４.福士淑子	７４
＊６.羽鳥和重	９１	＊ ６.金子しのぶ	７３
＊７.加賀屋博文	８９	＊ ７.千葉あかね	６９
＊８.国沢五月	８３	＊ ８.渡辺初実	６８
９.佐藤隆徳	８１	＊ ９.加納尚子	６３
＊９.富田吉郎	８１	＊１０.鈴木夕紀子	６２

＊：NTメンバー

女子は、参加１１レース中、全日本を含む７つの大会で優勝した木植が、圧倒的なポイントでトップに立った。完全に頭１つ抜け出ている感じだ。

２位には高野由紀と宮本知江子が入った。高野は終盤に入って、早大２位、全日本２位と往年のパワーを見せつけて大きく浮上した。かつての全日本Ｖ９の王者の貫禄といえよう。宮本は公認静岡大優勝のあと、長く、不調な時期が続いた。やはり終盤になって復活の兆しを見せ、早大優勝、全日本４位と好成績を残し、順位を上げている。

４位は志村聡子と福士淑子。この２人は、千葉大大会終了時の中間報告で２位につけていた。両者とも全日本の成績がふるわない。志村は学生でトップ。インカレの疲れも残った全日本を別に見れば、筑波大３位・朝日２位・東日本２位・西日本３位（彼女はD19-20Eランナーだが、公認大会の多くはD21Eと同一クラス。総合順位で示している。）と、すばらしい成績を残している。数字だけを見れば、木植に次ぐNo.2であった。福士は、O-Cup・京葉などで優勝したが、終盤で失速。早大・全日本とも全くふるわず、全日本は実に１３位に終わっている。今年の復活に期待したい。

６位金子は、比較的安定した得点をあげているが、O-Cupの２位が最高。何か１つでも優勝得点をあげてもらいたいところだ。７位、千葉あかねも比較的安定したポイントを続けた。朝日・千葉大で３位、全日本は５位である（彼女も19-20Eランナー。公認は総合順位）。学生としては志村に次いで２位。志村とともに、今後のD21Eでの活躍が楽しみ。８位は、WM選手の渡辺初実。後半戦が全くふるわなかった。９位、加納尚子は１５～１６ポイント（５～６位）あたりのポジションで安定していた。

その他、インカレ１位・２位の金並由香・酒井佳子あたりは、あまりいい得点をあげていない。酒井は千葉大優勝・筑波大２位と参加レースでの好成績が光っているが、なにぶん北海道在住の彼女は参加レース数が、合計する４レースにも満たなかった。金並は、西日本の２位、全日本の６位などがあったが、年度前半が目立っていなかった。

９４年度エリートポイントの得点方法

- 次の８大会の最高クラスを指定レースとする。
  東大（6/5）筑波大（10/30）東日本（11/6）西日本（11/13）朝日（11/27）千葉大（12/）早大（2/）全日本（3/26）
- 男子は各レースの１位に２５点、２位２４点、３位２３点・・・２５位１点の得点を与える。
  女子は各レースの１位に２０点、２位１９点、３位１８点・・・２０位１点の得点を与える。
- 得点の高い３大会の合計点を年間得点とし、この得点でランキングを決める。
- 全日本大会のH21E・D21Eクラスの得点者には、男子は３点・女子は２点の追加点を与える。
  したがって、男子は１位２８点～２５位４点、女子は１位２２点～２０位３点となる。
- 最高クラスと同じコースの別クラスがある場合は、両クラスの混合順位とする。（例：D21EとD19-20E）
- 男子の最高クラスが同レベルの２つのコースにわかれ、選手が無作為に両コースに振り分けられている場合は、両コースとも１位２５点、２位２３点、３位２１点・・・１３位１点の得点を与える。（例：HE1とHE2）
- 公認大会の19-20Eクラスでは１位１５点、２位１４点、３位１３点・・・１５位１点の得点を与える。
  ただし、この得点は順位の良い１大会だけ適用される。

1993年男子エリートポイント

順位	氏名	合計	山梨	(19)	静岡	(19)	東大	O-CU	(19)	筑大	朝日	(19)	東日本	(19)	京葉	(19)	西日本	(19)	千大	早大	全日本	(19)
1	村越真	103						25									25		(24)	25	28	
2	鹿島田浩二	102			25										25				25		27	
3	広江淳良	94			(16)		(13)	23			24		23						(20)		24	
3	菅原琢	94	(21)		24		(19)	(4)		25					23		22		(20)	(18)	(17)	
3	竹内藤雄	94	25				(12)	24		24			21		(8)				(1)			
6	羽鳥和重	91	(16)				25				25				20		21		(18)			
7	加賀屋博文	89	(17)		22					22					24				21	(8)	(5)	
8	国沢五月	83	(5)		(3)								20		22		24		17		(12)	
9	佐藤隆徳	81	19				21			17	(6)		24				(6)		(16)			
9	樋口一志	81			18								25		19		(13)				19	
9	富田吉郎	81	(8)		(1)		(16)			19	22		22		18		(17)					
12	鈴木卓弥	80	(6)		20						20				21		19			(19)		
12	入江崇	80				15	18	(15)								15			23	24		12
14	玉木圭介	77						20		20					(10)		16				21	
15	澤田晴雄	76					24	17		(5)			(6)		(6)				12		23	
16	鈴木雄輔	74	22		(13)			(7)		14	23				(6)				(11)	15		
16	稲葉英雄	74					20								9		23			22	(7)	
18	稲津隆敏	69					(5)	19			17				16				(10)	17		
19	田中正人	65			(2)						18		(9)		12		(11)		15	20		
19	宇野裕人	65	(7)				9	(1)		23	19		14		(4)				(5)			
21	元木悟	63	(4)		(4)		(7)			21	9								8	(4)	25	
22	山本英勝	62			17			18							13		14			(13)		
23	櫻井太郎	60			21			(5)			12		16		(7)		(1)			11	(9)	
24	澁川英雄	56	24		10		22															
25	福留潔	55					1	21			(1)		11						(3)		22	
26	井上健太郎	54	14		9						15										16	
27	JORG VETTER	52					15	22													15	
27	鈴木廉史	52													1		8			23	20	
29	森内知男	51	20		(5)					8	8				15				(4)	(5)		
30	藤井範久	50	23																7	7	13	
31	落合公也	49								12			19				18					
32	小林哲	48					12			9						14			13			13
33	小長井信宏	46			8												12				26	
34	川口匡	45									10		10		17						8	
34	砂川貴幸	45	9		19			16		1												
34	小河原成哲	45	13							18									14			
34	太田尊司	45			14												20				11	
38	中村弘太郎	41			23																18	
39	武田光	39			15					10					14							
40	竹沢聡	38	18							11							9					
41	石井博和	36					6			13			17									
42	山内亮太	35				10										13		13	22			
42	中嶋哲夫	35	12				23															
42	梅林正治	35									14		12						9			
45	上坂寛之	34								16					3		15					
46	利光良平	33			12						21											
46	安斎秀樹	33					8	(2)		7									6	12		
48	藤平正敏	31	11										15				5					
48	中島陽一	31									16									9	6	
48	宇佐美俊哉	31						13					14				4					
51	高島和宏	30						14			3						7			6		
52	木本浩慈	28											18								10	
53	岡安隆史	27				3					13					12						14
54	B.ﾐﾙﾎﾞﾙﾄ	26	15					11														
55	清谷智弘	24						9						15		5						4
55	吉田勉	24			7		17															
57	鞆田金一	23																	2	21		
58	平井均	19						8							11							
58	加藤裕	19					10									9						
60	佐藤信彦	18											8				10					
60	吉村年史	18				13												15		3		15
62	緒方賢史	17				7		10														
62	土井聡	17														3				14		
64	山根卓二	16								2						1		14				5
64	佐々木良紀	16				8				4				12								
64	田代雅之	16	10		6																	
64	藤城公久	16				5		3			4			9		6						8
64	野田健史	16																		16		
69	鈴木篤	15								15												
70	白神謙吾	14																			14	
70	川田正道	14				14												11				
70	松下愛則	14					14															
70	小林岳人	14	2					12														
70	大西淳一	14												14		8		8				
75	野中俊樹	13								3										10		
75	高野真弘	13												13				5				
75	小林毅	13			11															2		
78	永井孝雄	12				2										11		12				
78	安良和寿	12									2					10						
78	十川亮	12				12								4								

1993エリートポイント女子

順位	氏名	合計	山梨	(19)	静岡	(19)	東大	O-CUP	(19)	筑大	朝日	(19)	東日本	(19)	京葉	(19)	西日本	(19)	千大	早大	全日本	(19)
1	木樋早生	82	20		(19)		20	(17)		20	(20)		(20)		(19)		(20)		(19)		22	
2	髙野由紀	76	17		(16)		19													19	21	
2	宮本知江子	76	(14)		20		(13)	(12)			17									20	19	
4	志村聡子	74	(8)						(15)	18	19		19		(15)		18		(12)		(12)	
4	福士淑子	74			17			20							20				17	(10)	(10)	
6	金子しのぶ	73	18		18		(17)	19			(11)				(16)		(15)		(14)	18	(11)	
7	千葉あかね	69				15			14		18				(12)				18		18	
8	渡辺初実	68	19		15		18	(13)			16				(6)		(5)		(15)		(15)	
9	加納尚子	63						15		(15)			16		(5)				16	(5)	16	
10	鈴木夕紀子	62						(11)		16	(12)		15		14		17			(12)	(5)	
11	長谷川恵子	59	(7)		13			16			(3)		17				13		(3)	(9)		
12	金並由香	57	(4)							14	7				(4)		19				17	
13	草野望	56	12		(12)		16	14		(7)	14						(2)		(2)	(8)		
14	酒井佳子	54								19									20	15		
15	飯村亜紀子	52								13			18		13				8			
16	金田収子	51					12								17				5	17		
17	田島利佳	50	13		10					(10)	13				(8)		14		(10)			
18	出田裕子	46	16												10						20	
18	渡辺弥生	46			11		14			6					11				4			
20	三井由美	42	11		(8)		10	9					12				(8)			(2)		
20	船橋亜希子	42								17			14						11			
22	宇野明子	40	15												18						7	
23	石川恵美子	39			6		11												6	16		
24	高木貴美江	32			14			10					8									
25	濱田由紀	29	3		9			11											(1)	(1)	6	
26	幡野淑子	27				10			10		10						7					
26	河合志穂	27				9					2		10				6					
28	下江範子	26	9		5												12					
29	福村仁美	25													9		4			3	9	
29	原志保子	25					7								2		16					
29	清宮秀子	25								12									13			
29	酒井か代子	25	10				15															
33	髙松伴子	24	2			14	8															
34	梅本敬子	22				13			13								9					
35	樋田佳子	21															10			11		
36	中嶋久美子	20								11	9											
36	白井由美	20			7																13	
38	田垣尚美	18						18														
38	小林正子	18	6				4	8														
38	山下和子	18				12									3		3					
38	阿部真弓	18															11			7		
42	片岡由紀子	17									4		13									
42	山口純子	17											9								8	
44	岩谷ひろみ	15								9										6		
44	長岡理恵	15									15											
46	本間厚子	14					6			8												
46	松本和美	14																			14	
46	中野宏美	14																		14		
49	染矢和子	13																		13		
50	佐藤由布子	12							12													
51	吉澤由実子	11				11																
51	雪原路子	11				8			11													
51	岡原桂子	11											11									
54	奥山陽子	10	1																9			
54	小林拓恵	10				7			9		1											
56	新桂子	9					9															
57	林ゆりこ	8									8											
57	金澤麻衣	8											7				1					
59	下川陽子	7																	7			
59	坂元祐子	7	5		2																	
59	河野典子	7													7							
62	髙松伴子	6									6											
62	鳥羽節子	6											6									
64	大坪奈美江	5					5															
64	三宅朋美	5									5											
66	北川文子	4			4																	
66	山本康世	4																			4	
66	三好幡子	4																		4		
69	吉川義子	3			3																	
70	木村祐子	1			1																	
70	小山由美子	1													1							

SQUAD　REPORT次号予告

SQUAD９４年度方針について　／　WM95予備セレクション方法について

WorldCup第一戦の報告　／　９４年度Jr.WM代表選手紹介

NT人物紹介（桜井太郎　志村聡子）

SQUAD広報担当　桐田幸宏

訃報

太田 勝美 氏（愛知県オリエンテーリング協会会長）

去る平成6年4月8日午前3時，クモ膜下出血のため，岡崎市の自宅で急逝されました。55才の若さでした。氏の生前のオリエンテーリング界におけるご功労を忍び，謹んで哀悼の意を表します。

編 集 部

……

［太田勝美氏の急逝の報に接して］　　石川県OL協会 森田　輝雄

4月8日の昼過ぎ，勤務先のFAXにJOA事務局より，太田氏の急逝の知らせが入りました。信じられない気持ちですぐ確認の電話をしました。

去る3月20日の伊勢市での全日本大会の折り，大会コントローラーとしての彼と今後のOL界の在り方や平成7年2月開催の「全国リレー」について語り合いました。彼のOLに対する情熱には頭が下がり，小生自身も頑張らなければと何時も勇気づけられたものでした。

彼とは年齢も近く（太田氏は1年先輩），大会では同じクラスで良く競い合ったものでした。テレイン内で会うとニヤッと笑ってお互いに別ルートを取り，ゴール後ルート選択について語り合いました。また彼は大会運営にもすばらしい才能を持っており，公認大会運営のマニュアルを教わったものでした。

JOLCからJOAへの移管への努力，東海北陸ブロックのまとめ役，東海地区，特に愛知県の会長としてのご活躍はすばらしく，OL界にとって欠かせない重要な方でした。

すばらしいオリエンティアとして，運営責任者として，大会コントローラーとして，行政とのパイプ役として，これからの日本のOL界の牽引者として，また国内は勿論のこと諸外国から信頼されるオリエンティアとしての足跡は大きいと思います。

「森田さん，第三回の全国リレーはうちが引き受けるけど，予算面で千葉のようにガタガタしないようたのむよ」「平成10年は東はおたく（石川県）だし，全日本はうち（愛知県）なのでお互い連絡をとって頑張ろうね」と語り合った言葉が耳元から離れません。

OLを愛する仲間の死去の悲しみと同時に，彼の分まで頑張らなければとの気持ちが入り混じった複雑な心境です。

太田さん，長い間ご苦労さんでした。安らかにお眠り下さい。本当に有難うございました。

合 掌

編集部より

◆まず連絡事項から。先月号のこのページで，本年9月にオーストラリアで行なわれるマスターズ・ゲームについて書かせていただいたところ，10名近いお問い合わせをいただきました。時を同じくして，ということは3月末から4月にかけて各地の大会で，マスターズ・ゲーム参加ツアーのパンフレットを配るなどして募集を計画していた旅行代理店／日通旅行さんから電話をいただき，「それでは」（私の考えでは，いくつものツアーが競合するのは参加者の得にはならないから）ということで，現在，前後のクインズランド選手権やオーストラリア選手権を併せ，6日間現地を走れるという旅程で新たに募集要項を作っていただいております。次号（来月半ば）までお待ちください。◆どちらの「クラブ」も3～4月に総会を開いて，本年度の役員や活動方針などを決めておられるでしょう。6月号ぐらいに，昨年同様，クラブ紹介を兼ねた「全国オリエンテーリングクラブ一覧」を掲載してみたいと考えておりますので，ぜひ登録してください。

情報あれこれ

＝長野県オリエンテーリング協会より＝

◆合宿情報◆

①「信州晴ヶ峰高原」(1:15000)
「国立高遠少年自然の家」(1:10000)

最近，多くのオリエンティアに利用されるようになってきた「国立信州高遠少年自然の家」も，昨年10月に長野県オリエンテーリング協会と R.M.O-サービス によって本格的O-MAP「信州晴ヶ峰高原」が開設されてから更に使いやすくなりました。最大 450名収容の施設は早い時期からの予約が必要。自動車でないと行けないのがネックですが，真夏の 1200mの高原は快適ですよ。

②「駒ヶ根高原」「千人塚」(いずれも1:15000)

夏合宿に人気のある「駒ヶ根高原」・「千人塚」は今年も健在です。昨年7月，中央アルプスフラワーロードが全通して両テレインの移動時間は自動車で約20分。旅館・民宿などの他にログハウスなど宿泊施設も充実しています。「千人塚」は残り 400枚。無くなり次第，長野県協会クローズテレインとなります。「山吹高原」は第8回日本学生オリエンテーリング選手権大会のテレインで，地図販売は日本学連が行なっています。

③「信州伊那高原　ますみヶ丘」
「信州大芝高原」(いずれも 1:15000)

昨年11月オープンの「信州伊那高原ますみヶ丘」は，第1回日本学生ショートオリエンテーリング選手権大会のテレイン。前述の「駒ヶ根高原」より自動車で北に約20分です。「信州大芝高原」は伊那ICより約 2.5kmで，初心者・中級者向けの白く平らなテレインです。

○地図の扱い：

「国立信州高遠少年自然の家」：
国立信州高遠少年自然の家
TEL. 0265-96-2525

「山吹高原」：
日本学生オリエンテーリング連盟事務局

その他：
長野県オリエンテーリング協会事務局　元木　悟
TEL. 0263-28-5127

O－JAPAN　発行人／田口 昭子　：　購読料　年間4月～3月 ¥3,600
〒233 横浜市港南区日野南7-9-5　：　(高校生以下)　¥2,400
TEL.045-891-7004　FAX.045-891-2500　：　1部あたり頒布価格　¥300
分室=Annex　TEL.0287-77-1977　：　'94. 1月～'94. 3月　¥750
郵便振替口座／（番号）横浜7－46870　（加入者名）O－JAPAN 編集部

：　編集責任者／田口　肇
：　Chief Editor: Hajime Taguchi
：　Editorial Address:
：　7-9-5, Hino-minami, Kohnan-ku
：　Yokohama, 233 Japan